平和文化研究　第 41 集（2021 年 3 月）

呼び起こされる長崎の過去

～長崎史研究と開港記念日の創出～

新木　武志

長崎総合科学大学

長崎平和文化研究所

Cover Artwork: Seiryo Ikawa

『平和文化研究』第 41 集（2021 年 3 月）

呼び起こされる長崎の過去

～長崎史研究と開港記念日の創出～

新木　武志

概要

明治期に長崎が近代的に再編成されていくとともに、長崎港を中心とした長崎史が創出され、地方改良運動で愛郷心や愛国心の高揚が求められるなかで、福田忠昭、古賀十二郎、永山時英、武藤長蔵らがそれを担い、輝かしい郷土史を語る長崎史を確立していった。その後も、開港記念日のイベントでは、政治的・経済的な目的から、市民のプライドを醸成するための「お国自慢」的な長崎の過去が呼び起こされ続けているが、長崎には東アジアのネットワークのなかでの多様で重層的な歴史がある。

目次

１　はじめに 2
２　長崎史の創出 4
３　長崎史の確立と地方改良運動 6
　（１）地方改良運動と福田忠昭 6
　（２）古賀十二郎の長崎史研究 9
　（３）長崎県立長崎図書館と永山時英 12
　(4) 武藤長蔵の歴史研究 14
４　開港記念日をめぐる論争 17
５　開港記念日の決定 20
６　戦時下の開港記念イベント 23
７　戦後の開港記念イベント 25
８　おわりに 27
９　注 29

１　はじめに

長崎では、明治中期に長崎の歴史の編纂が試みられはじめ（「長崎史」と呼ばれる）、明治末から大正・昭和初期になると、小学校の教員を中心に郷土誌や郷土の先賢伝が編纂され、史蹟の保護や長崎史の研究を目的とした団体も相次いで設立された。この郷土史への関心の高まりは、長崎だけではなく全国的なもので、西垣晴次によれば、東北 6 県の場合、明治・大正期にはあわせて 74 の郡があったが、この時期に刊行された郡史・郡誌の総数はその半数近くの 32 点に及ぶという。そして、それら小中学校の教員が中心となって編纂され、

それ以後も教員たちが郷土研究や地域研究を推進したとされる[1]。

ただし、この明治末期から昭和初期に取り組まれた郷土史研究については、木村礎が、①視野が狭く、我田引水かつお国自慢的である、②中央の史実や人物との関係において郷土の歴史を語る傾向が強い（これも我田引水的かつ奥に自慢的である点について①と同じ）、③総じて「非科学的」である、と整理している。そのため木村は、戦後は「郷土史」に代わって、「地方史」という用語が普及し、全体性や法則性とのかかわりを強く意識するようになり、さらに「地方史」についても、1970年頃からは、中央に対する地方の従属感が批判され、地域独自の歴史を発掘し、叙述しようとする立場から「地域史」という用語が用いられるようになったと指摘している[2]。

その一方、長崎では戦前の長崎史研究について、郷土史家の越中哲也が、「国際的視野に立った史観と我が国の文化史上よりながめた史観」をもち、「郷土史の枠内に止ま」らない、「長崎という土地なるが故に生じた歴史的事象を通じて展開してきた長崎文化史の総体を考究する」長崎学を確立させたと高く評価している[3]。長崎市も、長崎学を「長崎港を中心に発展してきた長崎市域を出発点とする、長崎の歴史や文化に関する学問・研究と定義」したうえで、「大正から昭和にかけて活躍し、『長崎市史風俗編』、『長崎洋学史』などの著作で知られる古賀十二郎先生をはじめとして、現在に至るまで大学、博物館、郷土史研究団体を中心に、数多くの長崎学に関する研究が発表・蓄積されてきました」と説明し、2016（平成28）年に長崎学研究所を設立して、長崎学の調査研究、普及啓発、後継者の育成などに取り組んでいる[4]。

このように、戦前の郷土史研究が戦後批判されてきたのに対して、長崎では、大正から昭和期にかけての古賀十二郎らによる長崎史研究は高く評価され、「長崎学」として現在に引き継がれている。なかでも、古賀十二郎の教えを受けた郷土史家の永島正一は、古賀を明治期の旧記を中心とする長崎の歴史の研究が盛んであったときに、シーボルトなどの著述を読破して学界に紹介し、長崎史研究に新しい分野を開き、長崎学を確立したと評価した[5]。それ以降、古賀は長崎学の確立者として位置づけられ、長崎の郷土史家のなかでも特別な存在とされている。

そのため、長崎大学などで日本史研究に従事し、長崎の歴史についての著作もある外山幹夫は、かつて古賀の主張を批判したときに、まるでタブーを侵したもののような驚きが地元の人の中から聞かれ、それに驚いたという。その経験から外山は、長崎の風土は相互批判をせず、互いに庇い合う傾向が強いようであると指摘し、学問の進歩のためには互いに批判し合うべきで、それこそが亡き古賀自身も喜ばれると信じると記している。そして、古賀の学問については、高度の史料操作による理論的論述の構築というより、むしろ即物的に事実を解明することを狙う考証史学の推進というのが適切な評価ではないかという見方を示している[6]。古賀による長崎史研究は、歴史研究としての不十分さも指摘されながらも、特別な存在として、これまで批判的な検討はほとんどなされてこなかったのである。

そこで、古賀らによる長崎史研究について、戦後の郷土史研究に対する批判を踏まえながら検討することは、現在の長崎学のあり方について考えるうえで必要であり、また、「長崎学」のように地域名を冠した地域学の取り組みが全国各地で行われているなかで、地域についての歴史研究のあり方を考えるためにも重要である。

すでに、明治末から昭和期にかけての郷土誌の編纂・刊行については、西垣晴次がその要因として大正天皇の即位記念、郡制廃止などをあげる一方、同時期の地方改良運動の一環に位置づける考えも見られるが、両者を直接結びつける資料はまだないため、今後の課題としていたが[7]、その後、地方改良運動のなかで史蹟・名勝の保存運動が全

国的に推進され、郷土史の編纂や偉人の顕彰などの施策が示されていたことが明らかにされている[8]。

それらの研究成果をもとに本稿では、明治中期に編纂された長崎史や、明治末期から昭和初期に長崎史研究に取り組んだ古賀とともに、永山時英（長崎県立長崎図書館長）、武藤長蔵（長崎高等商業学校教授）、福田忠昭（長崎市小学校校長）らを取り上げ[9]、地方改良運動との関係を中心に、長崎史研究が何を目的として、どのように始まり、確立されていったのかを考察していく。そして、それをもとに古賀ら 4 人が 1930（昭和 5）年に長崎商工会議所から長崎の開港記念日の選定を求められた時の議論と、その後はじまり、現在も受け継がれている長崎の開港記念のイベントを通して、長崎史研究が長崎でどのような役割を果たしてきたのかについて考えてみたい[10]。

２　長崎史の創出

明治になって最初に著わされた長崎の通史は、金井俊行が 1886（明治 20）年に著わした『長崎年表』（全 3 巻）である。金井は、長崎代官所の手代を勤める家に生まれ、長崎代官所書記から明治政府の官吏となり、長崎県少書記官、佐賀県大書記官を務めた後、長崎区長となった人物で、長崎区長として、コレラが大流行するなか、開港場としての長崎の発展のために水道敷設に取り組んだ人物として知られている。『長崎年表』は、金井が業務のかたわら、明治になって散逸する徳川幕府治下の旧い文献の収集に努め、長崎区役所に保管を託し、区長に就任後に、その余暇を利用して収集した文献をもとに整理した編年体の歴史書である。

金井はその増補版である『増補長崎略史』（1899 年）の叙言で、「長崎港の事蹟は我邦の歴史上関係を有する大且重なりとす」とした上で、これまでの正史とされる『長崎志』とその続編は、記事が官の事にとどまり、民間の事がなく、外交にかかわる文書は秘書として多くが省かれており、『長崎記』『長崎港草』『長崎古今集覧』などは憶説や謬見があり、商業の事がほとんど欠けているため、区役所に収集した旧記によって『長崎年表』を刊行したと述べている[11]。

その後、1893（明治 26）年には、長崎在住の井口丑二による『長崎小史』が刊行されたが、その序では、「我長崎は天然の良港にして其名夙に海外に知られ実に皇国文明の発現地たり今其事跡を探り其人物を追想す豈又爽快の業にして而も亦皇国の臣民に緊要の事ならずや」と述べ、これを「市内児童の為に」著わしたと記している[12]。そして、長崎港の歴史を発達期・成熟期・老衰期・革新期に区分した「長崎港盛衰大観之図」を掲載し、「開港より今日に至る三百二十余年、其間の盛衰沿革より、学術技芸人物に至り、特り当港に伝ふべきのみならず、本邦の文明に関するもの少らず」[13]として、長崎にかかわる出来事や人物を 84 項目に分けて記述している。

1902（明治 35）年には、長崎出身の政治家でありジャーナリストであった福地源一郎が『長崎三百年間 外交変遷事情』を著わした。その叙自では、「崎友会諸氏は余に此稿ありと聞き長崎は其三百年間この変遷の衝に当りて密接の関係あるの要衝たりしを以て長崎青年諸氏の為に講演せん事を懇請せらる、乃ち之を応諾し更に長崎に関せる往時を増補して講演し又更に稿を改めて此の書と為し」[14]と述べており、この本が長崎の青年たちのために、長崎に関する記述を増やした日本の外交変遷史として書かれたことがわかる。

1903（明治 36）年には、荒木周道による『幕府時代の長崎』が刊行された。その叙言では、「其ノ書（注；、金井俊行の『長崎年表』）悉ク編年体ヲ以テ記述スルガ故ニ人若シ一事一物ニ就テ其ノ要ヲ知ラント欲スルモ全編ヲ通覧シテ而シテ更ニ所要ノ記事ヲ対照セザル可ラズ[…]一般ノ世人ハ到底其ノ煩シキニ堪ヘズ市長横山氏之ヲ遺憾トシ頃ロ予ニ嘱スルニ記事本末体ノ長崎史ヲ編纂スルノ事ヲ以テセラル」と、『長崎年表』が編年体であっ

たので、叙述形式の長崎の歴史書の編纂を市長から委嘱され、同書が編纂されたことが述べられている[15]。また、長崎市長であった横山寅一郎は、その序で、「崎陽ノ以降連綿地元亀トシテ皇国枢要ノ貿易場」であり、「崎陽ノ外交史ハ則チ日本ノ外交史ニシテ瓊浦ノ貿易誌ハ則チ扶桑ノ貿易誌」であるが、これまで長崎について記したものの多くは「大勢ニ疎ク小事ニ密ナルノ嫌」があったことから執筆を依頼したと述べている[16]。これらから『幕府時代の長崎』は、「皇国枢要ノ貿易場」としての長崎の歴史が把握できるような叙述形式の歴史書をという求めに応じて編纂されたことがわかる。

当時の長崎市は、長崎港に大型船が停泊できるようにし、港と鉄道を接続するなどの第 2 次港湾改修事業を実施していた。長崎港は、徳川幕府のもとで長崎が貿易や国際関係を管理する特権的な都市とされたことから、中国商人やオランダ東インド会社の貿易ネットワークと日本市場を結び付ける接点となり、繁栄していたが、鎖国体制の終焉とともに、貿易港としての地位は相対的に低下していた。ただし、アヘン戦争以後、上海を中心に蒸気船による定期航路網が形成されたことによって、中国に近く、三菱が経営する造船所と炭鉱があったことから、欧米列強や日本の軍民の艦船の修理や石炭補給のための重要な寄港地となっており[17]、さらに、日清戦争での日本の勝利による台湾の植民地化や中国・朝鮮半島での利権・勢力の拡大が進むと、長崎ではこれらの地域との貿易の拡大に期待が高まっていた。そこで、港湾機能の整備が急務となり、1897（明治 30）年に第 2 次港湾改修事業が開始されていたのである（1880 年代に行われた第 1 次港湾改修事業が財源不足により不十分に終わっていた）。

しかし、工事は難航したため、反対運動が広がるなかで、横山市長は 1902 年に事業の変更案と追加予算案を市会に提出し、市会で追加予算を減額して可決させるとともに引責辞任し、その後の市会で市長に再選した。そうして、1904（明治 37）年 11 月に港湾改修事業は竣工し、さらに、翌 1905 年までに長崎港の浚渫による土砂を利用した市街地の海岸部、出島の前面から長崎港に注ぎ込む浦上川河口など約 20 万坪の埋立てがおこなわれ、長崎港は大型船舶の着岸が可能になるとともに、長崎港を囲む広大な中心市街地が生み出された。このようななかで編纂されたのが『幕府時代の長崎』であった。

このように長崎史の編纂は、長崎の水道施設や港湾機能が整備され、長崎港を中心として近代的な都市として編成されていくなかで、それらを担った長崎の指導者層らによって行なわれた。つまり、明治期の指導者層は、長崎港を中心として長崎を近代的な都市として再編成していくとともに、それにふさわしい長崎港を中心とした、日本における外交や貿易の要地としての長崎の歴史を「長崎史」として再編成していったのである。

それとともに、1880 年代後半から 1900 年代初頭の時期は、欧米や日本で、近代歴史学が成立し時期であり、ネーションの物語としての国民国家の歴史が創出されていった時期でもあった[18]。日本でも、江戸時代の身分制にもとづいて編成された社会秩序や意識を一掃し、均質な国民や市民を作り出すためには、ネーションの物語とその一員としての物語が不可欠であった。そのなかで長崎を「皇国文明の発現地」、「（外交）変遷の衝に当りて密接の関係あるの要衝」、「皇国枢要ノ貿易場」などと位置づけた「長崎史」は、この「皇国」（ネーション）の臣民である長崎市民を創出するための、「市内児童の為に」、あるいは「長崎青年諸氏の為に」創りだされた長崎の物語であったといえる。

そこで、『幕府時代の長崎』の第 1 章「長崎市ノ起源」では、長崎の地は瓊々杵尊が降臨した旧蹟で、昔は瓊杵田浦と称したが、後に瓊浦、深江浦などの別名があったなどの伝説とともに、神功皇后、百済国王琳聖太子、空海らが立ち寄ったという伝説を紹介している。そして、「口碑ノ伝フル所固ヨリ悉ク信ジ難シト雖モ[…]此地ガ海外渡航ノ

要津タリシヲ説クハ旧記皆符節ヲ合スルガ如シ」と述べており[19]、同書の叙言では、市役所が所蔵する旧記と金井俊行の『長崎年表』、福地源一郎の『長崎三百年間』を骨子として、これに多少の記事を加除したと記している[20]。

ただし、長崎の旧記のなかで長崎の正史とされる『長崎志』の「長崎開基之事」では、冒頭「西海道九州肥前国彼杵郡長崎元之名ハ深江浦ト云リ。其地極西ノ辺僻ニテ往昔世ニ知ル人希ナル故、古代ノ事実分明ニ伝来無之」として、長崎の旧名を紹介するにとどまっている。他の旧記も、長崎を「片田舎」(『長崎記』)、「鄙辺の遠境」(『崎陽群談』)、「在極西偏陬」（『長崎港草』自序）などと述べ、その多くは瓊々杵尊と神功皇后、百済国王琳聖太子、空海についての伝説の記載はなく、記載がある場合も、これらすべてを網羅したものは、管見の限りでは存在しない。

また、『長崎三百年間』の「発端 長崎市の由来」の項でも、長崎は往昔は深江村と呼ばれる一小漁村と述べ、「或は云ふ此地や上古よりして通外の港津と為り既に神功皇后征韓の御船も此所に艤して纜を解かせ給へりと、其遺跡と名くるもの無きに非ざれども其果して然るや否は余が知らざる所なり」と、古代の伝説の信憑性については留保している。さらに、荒木が参考にした書物ではないが、『長崎小史』でも、創設の冒頭で、「長崎は元と西海の一僻陬なり、元亀元年葡萄牙の商船始めて来たり」と述べ、その名称についても、「瓊浦と書するは、後年支那人の用ゐたるにて」と記している[21]。

そのなかで、『長崎年表』は、その引用書目として、長崎を「極西ノ辺僻」と見なしていた『長崎志』など 44 冊の書名をあげているが、「長崎之起源」の項では、瓊々杵尊の伝説の記載はないものの、瓊杵田津や瓊浦などの古名を紹介するとともに、「長崎ノ地往昔海外渡航ノ渡ロタリ」と述べ、神功皇后や百済琳聖太子、空海の伝説を紹介し[22]、それらをもとに長崎を「往昔海外渡航ノ渡ロ」であったと記している。したがって、『幕府時代の長崎』は、この金井による『長崎年表』を受け継ぎ、古代の神話や伝説を寄せ集め、長崎を古代からの「海外渡航ノ要津」と位置づけたと考えられる[23]。こうして、長崎は皇国日本のなかで、古代から対外的な交流で重要な役割を果たしてきたという長崎史が創出されたのである。

3　長崎史の確立と地方改良運動

（1）地方改良運動と福田忠昭

長崎市小学校職員会は、1911（明治 44）年に『長崎郷土誌』を出版し、1916（大正 5）年には、長崎市内有志から賛助金を集め、長崎公園に「長崎開港以来明治維新ニ至ル期間ニ於テ事蹟ノ最モ顕著ナル代表的人士」[24]101 名（外国人 22 名を服務）を記念した郷土先賢紀功碑を建設するとともに、『郷土先賢列伝』を刊行し、1918（大正 7）年には『長崎市郷土誌』を出版した。また、1919（大正 8）年には長崎県教育会が『長崎県人物伝』を刊行し、1921（大正 10)年には長崎市小学校歴史研究団が『教授資料としての長崎郷土史』を発行した。このように明治末期から大正期にかけての長崎では、郷土誌の編纂や郷土の偉人の顕彰などが盛んに行われ、それを学校で教えるための教授資料の作成も行われていた。

この時期の長崎は、日本が日露戦争の結果、朝鮮半島を支配下におき、中国東北部（旧満洲）に権益を拡大し、これらの諸都市と大阪・神戸を結ぶ海陸のルートが整備されたことで、長崎港の重要性が低下し、その衰退が進んでいた。全国的にも、日露戦争後の農村部の疲弊や町村財政の逼迫、さらに資本主義経済の発展に伴う労働運動や社会主義運動の活発化などが生じていた。そこで、日本が対外進出を進めるには、地方市町村を再建し、民衆を国家を支える国民として育成していくことが求められるようになり、1908（明治 41）年 10 月に戊申詔書が発布された。これは、「宜ク上下心ヲ一ニシ忠実業ニ服シ勤倹産ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ実ニ就キ荒怠相誡メ自彊息

マサルヘシ」と、国民に勤倹を求め、華美を戒め、国運発展のために国民が協力することを求めたもので、これを契機に、内務省が主導し、市町村の財政基盤の強化と国民の教化を図る地方改良運動が開始されることになった。さらに、1910（明治43）年の「大逆事件」によって、危機感をもった文部省も、国民教化のための小学校教員の役割を重視し、「健全なる国民的精神を涵養する」ための最有力の手段として社会教育（通俗教育）を奨励するなどの方針を示した[25]。

こうして地方改良運動が全国的に展開されていくなかで、国民教化策の一つとして重視されたのが郷土の歴史や偉人であった。1909（明治42）年に開催された地方官会議では、平田東助内務大臣が、名勝・旧蹟地の調査と保存計画を訓示し[26]、同年の第1回地方改良運動講習会では、内務官僚の井上友一が、「自治訓練の方法」の一つとして、歴史に依る自治の訓練方法を挙げ、「どうか郷党の中でも、村の為めに苦辛して、功労のあった人などの事跡を取調べ、さうしてさういう人の墓を義墓と致し、公費を以てそれを保護したいものです。其の人の事跡を記して、義人録といふ様な名称を附け、さうしてそれを後世に遺すのも良かろうかと考へます」と述べている[27]。高木博志によれば、井上友一は、この時期の内務省の政策をリードした人物であり、地方改良運動において、図書館の設立、郷土史の編纂、史跡・名勝の保存、文化財の展示、歴史上の人物（偉人）の顕彰などの施策を示したとされる[28]。

また、地方改良運動の推進のために、内務官僚を中心に半官半民団体として設立された報徳会（後に中央報徳会）の機関誌『斯民』に掲載された、史蹟名勝天然記念物保存協会会長の徳川頼倫の講演記録「愛郷心の保護」では、「郷土を尊重致し、保護致すといふとは、愛郷心を盛んならしめます。さうして其の愛郷心が積りまして、愛国心となる」と述べている[29]。このように、地方改良運動のなかで、郷土史や史跡・名勝、偉人などは、愛国心の基礎となる愛郷心を高め、郷土に貢献する国民を育成教化する手段とされていった 。

そこで、長崎市小学校職員会が編纂した『長崎市郷土誌』（1918 年）であるが、その緒言には、県から各郡市小学校に対して学校所在市町村を区域として郷土誌を編纂すべき旨で要目の指示があり、長崎市小学校職員会は市費からの補助も得て編纂したと記されており、県からの「学校職員並に自治民育の局に当る者は郷土誌を熟読し善良なる自治民健全なる国民の養成に資すべきこと」、「児童訓育に方り郷土の自然偉人の言行風俗習慣及生活の状態等を考慮して郷土を愛し先賢を尊び郷土の発達に貢献せんとするの念を養ふこと」、「青年会婦人会通俗講演会其他市町村民教化の資料として郷土誌を利用すること」などの指示が掲載されている。そして、その例言では、同書について「学校職員並に自治民育の局に当る者をして、市民教化の資料たらしめんが為に編纂したるものなり」と明記されている[30]。これらのことから同書は、地方改良運動のなかで行政の指示や支援のもと、学校教育や社会教育による国民教化の資料として長崎市の小学校教師らが編纂したとみて間違いない。

そして、この長崎市小学校職員会による『長崎市郷土誌』（1918 年）や『長崎郷土誌』（1911 年）、長崎県教育会編『長崎県人物伝』（1919 年）の編集委員を務めたのが、福田忠昭である（『郷土先賢列伝』と『教授資料としての長崎郷土史』は編集委員の記載がないため、確認できない）。さらに、『長崎郷土誌』の例言には、「幹事宇土藤作会員福田忠昭の両君は、別項臨時委員として尽力せられたるのみならず、尚ほ明治四十一年十月以降本誌の編纂に関しても、其の助力を得しもの少なからず。特に其の労を謝す」と特記されており、『長崎県人物伝』の小序では、「小泉委員長福島県に転任せるありしも、福田委員専心鋭意編纂の任に当たられ」と評され、巻末には福田による附記が掲載されている。これらから、長崎の郷土史に関わる

編纂事業では、福田忠昭が中心的役割を果たしていたと考えられる。

福田は 1879（明治 12）年生まれで（1930 年没）、長崎師範学校を卒業し、長崎市の小学校の教員や校長を務めるとともに[31]、長崎の歴史研究に取り組んでいた。その著書『振遠隊』（1918 年）巻末の「本書編纂経路」には、「明治三十五年の夏、余は長崎小史を読み長崎史が貴重なる史実に富めるを知り、其の研究に着手」したとある。さらに、それまで自宅があった「城の古趾」と呼ばれる丘が、長崎氏の古城跡であることを知ると、これを公園として保存しようと考え、その詳細な歴史を知るため荒木周道を訪ね、市長の同意も得て、市役所が所蔵する古文書の閲覧を許可されたことから、暇があればその蔵書を常に熟読したという[32]。

また、戊申詔書が発布されると、福田は長崎師範学校同窓会が発行していた『瓊浦同窓会雑誌』の第 188 号（1909 年 3 月発行）に「整正時代」という論評を寄稿し、明治時代は西洋文明を急速に導入し、物質的には進歩する一方、「我国の美風たる剛毅勤勉誠実等の精神的諸徳を逸失した」皮相的虚飾的文明「過渡時代」であったが、遂に戊申詔書の煥発となり、矯風会や勤倹興産組合が設立されていることなどを指摘している。そして、輸入すべきものはすべて輸入し尽くしており、「整正」の彼岸に到達したものとしなければならず、明治 42 年は「整正時代」であるとして、「教育事業は社会の根底に向つて一大変革を与え一新生面を開かしむ根底の変革とは何ぞや人心の更新之なり人心更新してこゝに健在なる社会を生ず国家を救ひ社会を擠（ママ）ふ一にこゝに拠らざるべからず身を教育事業に委するものゝ責任やそれ大なり」と述べ、教育者の奮躍を促していた[33]。

1909（明治 42）年 4 月には、長崎県が文部省から歴史上顕著なる遺跡等で国民教育に裨益ありと認められるものの調査が命じられたが、（1909 年 4 月 25 日東洋日の出「国民教育資料調査」、長崎新報「県下の遺跡調査」）、その数日後福田は『九州日の出新聞』に「郷土史跡」の「掲載趣意書」（1909 年 4 月 29 日）を発表している。その趣意書では、「市四周に於ける市民祖先に関する史跡は日に削られ月に減じて顧みるものなきにあらずや」、（長崎の）「今日の不繁栄を挽回して真にその繁栄を求めんとすれば必ずや歴史的に攻究すべし」と訴え、この後、長崎の史跡や人物についての連載を翌 1910 年まで続けた。

さらに、『瓊浦同窓会雑誌』第 192 号（1909 年 9 月）に福田が寄稿した「小学校教員と古跡調査」という論評では、地方官会議での内務大臣の訓示で古跡保存の一項があったことを紹介し、それを「政府が整正の第一塁に達した一現象」と指摘して、「之（注：古跡）を保存し尊重するは正に祖先に対する吾人孝道の端たるなり進んで国家に奉じ退ひて孝道の一端を斉す」と、その意義を説明している。そして、「小学教員はその職務の一として各自奉職地の古跡を調査研究せよかくて一は其職に奉じ一つは児童教養の道を拓き児童をして進んで国家に報い祖先に仕へ退ひて一身を斉へ後世子孫に示めすの途を知らしむ又偉ならずや」と訴えた。

このように福田は、戊申詔書や内務大臣が示した古跡の保存が、「人心更新して」「健在なる社会を生」じさせ、「進んで国家に報い祖先に仕へ」るための国民教化を目指すものであり、古跡を通して児童を教化していくことが教員に求められていると理解し、いち早く長崎の史跡の紹介を始めていた。そのため、国民教化のための資料として古跡や郷土史などをまとめた郷土誌を編纂するうえで、小学校の校長を務め、郷土史について研究を重ねていた福田は適任者とされたのであろう。

さらに福田は、『東洋日の出新聞』に 1911（明治 44）年 12 月 3 日から 16 日にかけて、「長崎市史編纂の議」（全 5 回）を寄稿し、「長崎市民百ヶ年精神界一方の指針となり、以て鼓舞奨励の大任を負へる長崎史が今や繕はれざる事あれば、長崎の将来を如何せんとはするぞ」、「水道・港湾二工

事は物質的大事業なり市史の編纂は精神的大工事なり」と、市史編纂の必要性を訴えた。そして福田は、1912（大正元）年 8 月に長崎市長の北川信従から『幕府時代の長崎』の増補訂正を委嘱され[34]、1913（大正 2）年に『増補訂正幕府時代の長崎』を完成させた。

1913（大正 2）年 2 月には、長崎出身の伊東巳代治を総裁に、北川信従長崎市長を会長、嶋助役、家永市議会議長、永見代議士を副会長とする長崎古蹟保存会が創立された。その規約では、「我郷土名勝旧蹟ノ保存発揚ヲ講シ兼ネテ郷党風教ノ裨益ヲ図ル」ことを目的に掲げており、会が取り組む事項として、名勝・旧蹟・墓地・建物等の調査・保存・紹介、古器名什の蒐集・保存・紹介、郷土の先哲の祠堂・記念碑・銅像の設置と祭礼、郷土史料の蒐集・出版、長崎史の編纂・出版、雑誌の発行、図書館・博物館の設置、講習会の開催などが定められ、事務所は当分長崎市役所内に置くことになっている[35]。この会の目的や取り組み事項は、地方改良運動で提起されたものであることから、同会は、地方改良運動のなかで長崎市が古跡の保存・活用などに取り組んでいると示すために結成したものと考えられる[36]。このとき、福田は会の理事に就任しているが、同会が関わった高島秋帆の 50 年祭の報道では、「古蹟保存会幹事福田忠昭氏」（東洋日の出新聞「本日の秋帆祭」1915 年 2 月 28 日付）と報じられているので、会の運営は福田に委ねられていたとみられる。

そして、1913（大正 2）年 12 月には、長崎三菱造船所で巡洋艦霧島の進水式に出席した閑院宮載仁親王が、式後に長崎県庁を訪問するにあたり、福田は長崎に関する文書の陳列方を命じられ、県庁陳列室の古文書や器物に市内の旧家から借り受けた所蔵品を加え、閑院宮にそれらの来歴や長崎との関係などを説明している[37]。大正初期、長崎で地方改良運動が展開されるなかで、それを積極的に推進しようとし、郷土誌の編纂や史蹟の保存に取り組んだ福田は、当時の長崎の歴史研究を代表する存在となったのである。

（２）古賀十二郎の長崎史研究

福田が『増補訂正幕府時代の長崎』に取り組んでいた 1912（大正元)年 12 月、古賀十二郎は『長崎評論』を創刊した（1913 年 3 月までに 7 号を発行)。古賀は、福田と同じ 1879(明治 12)年に、江戸時代から続く長崎の商家で生まれ、長崎市立商業学校を卒業後に東京外国語学校英語科に進み、1903（明治 36）年に広島中学の英語の教師となったが、1906 年に辞任して長崎に戻り、家業を継いだ。しかし、古賀が打ち込んだのは家業ではなく、長崎の歴史研究であった。

後年、古賀は、商業学校の同級生と長崎民友新聞社副社長との鼎談「長崎の昔を語る」（長崎民友新聞 1953 年 1 月 21 日）で、歴史家を志した動機を問われ、長崎商業学校で菅沼貞風の大日本商業史の講義を聞いたが内容が難しくて分からなかったけれども、先生から菅沼が 17、8 歳の時から書き始めた本が読めんことがあるかと怒られたことをあげている。そして、「それから菅沼の本を読むうちに、長崎は海岸線が長く、出入りが激しい。日本でこういうところは余りないだろう。これは考えて見ると日本の縮図だ。外国交渉も盛んにせんといかんと痛切に感じた。もちろん商業学校の生徒だったので経済的面だけ見て侵略のことは考えてみなかったが、外国貿易とか、日本で生産業を盛に設けて内外に発展する必要がある。長崎の研究をすれば日本の研究になるということに思いを致し親戚の反対をおしきつて歴史の勉強に没頭した」と回想している。

古賀が影響を受けたという菅沼貞風の著書『大日本商業史』とは、日本の古代から江戸時代初期までの外国との通商貿易の歴史をまとめたものであるが、本文の最後では、「吾人は敢て彼の欧洲各大国の如く他人の国土を奪掠して自己の財嚢を充たさんと欲するものにあらざれとも苟も商業を振起せんと欲するには其進路に当れる障碍を切開く

へき勇気なかるへからざるを知る吾人日本人たる者此一国興廃の時に際す遠く往昔を顧みて近く来今を思わさる可けんや」[38]と、日本が欧米諸国に対抗して積極的に海外進出を図るべきと訴えている。さらに、同書に附録として掲載されている菅沼の書簡（「菅沼貞風君経綸一斑」）では、「我国今日の謀たる第一に戦端を開かさるへからさるものは朝鮮にあらす支那にあらすまた英魯独仏にあらす只西班牙に御座候然れともこの事たるや決して日本政府の手を以て成得へき義に無之即志士大人ありて頻りに呂宋に植民し土人と与に西班牙人を放逐し然る後我国の助けを得て其独立の基礎を定め扨呂宋王国の王位を以て我国の天皇には奉るべき義に有之候」とフィリピンの属国化を説いていた[39]。

そして、菅沼も自らマニラに渡り、製麻会社設立の準備をすすめたが、コレラのため急逝した。この明治期の代表的な南進論者に刺激され、日本を「内外に発展する必要がある」と考えたのが、古賀の長崎史研究の原点であった。

そして、古賀が 1912（大正元）年に創刊した『長崎評論』[40]の発刊の辞では、「長崎は慥かに新機運が向いてきた。市民は漸く覚醒の眼を挙げた。[…] 回顧は如何にわが長崎の人士をしてその自立の心を鼓動せしむるかよ。彼等をして尚深くその郷里を愛するの念を起こさしめよ。郷里を愛するの念はすなわちその郷里の繁栄と幸福とを希う心では日本の文明史上最も重要なる地位を占むる長崎の歴史的研究に其一半の力を瀝ぐ。斯くて吾人は新古両途の方面に着々と歩武を進める」と述べている。こうして古賀も、日本の対外進出とともに、地方改良運動が開始され国民教化が求められるなるなかで、「郷里を愛するの念を起こさしめよ」と訴え、長崎の歴史研究について発表しはじめたのであるが、『長崎評論』に古賀は、玉園散人のペンネームで次の歴史研究を発表している（表１）。

表１『長崎評論』に掲載された古賀十二郎（玉園散人）の歴史研究

	タイトル	内　　容
第1号	繍江熊斐（一）本邦に於ける南蘋派の開祖神代甚左衛門	享保期に長崎に来航した沈南蘋に絵を学び、南蘋派の開祖となった神代甚左衛門の紹介
第2号	渡邊秀石先生	明僧逸然に絵を学び、後に隠元の教えを受けた渡邊秀石の紹介
第3号	施福多先生疑獄の顛末（一）	ケンペルやツンベルグ、シーボルトと、彼らと交流があった日本人について記すとともに、ケンペルの『日本歴史』の英訳本の一部を紹介
第3号	隠元禅師	参考書を渉猟して、哲学大辞典に掲載されていた隠元の事跡が簡潔で、最も信憑する足るとして、その全文を転載し、附考として隠元に関する
第4号	中山作三郎先生ドーフ、ハルマ字書編纂者	オランダ商館長ドーフとともに、『ドーフ・ハルマ』（蘭和辞書）を編纂した中山作三郎の紹介
第5～7号	赤人滞在中日記中山文雄先生遺稿　後学玉園散人校註	ロシアからレザノフが長崎に来航したときに訳官を務めた中山文雄が、このときの出来事を書き残した日記の発表
第7号	蘭館長ドーフ・道富丈吉由緒書	史学雑誌に掲載されていたドーフの略歴の抄録と、大田蜀山人『増訂一話一言』にあるらドーフと日本人女性との間に生まれた子ども道富丈吉の由緒書

これらから、古賀が長崎を舞台に、日本と中国・ヨーロッパとの交流や交渉についての研究に取り組み、そのために江戸時代の文献とともに、英語の文献（ケンペルの『日本歴史』の英訳本）や史学雑誌も読んでいたことがわかる。さらに、古賀

は、「幕府時代の長崎の増補に就いて」(『長崎評論』創刊号）で、長崎市役所が福田忠昭に『幕府時代の長崎』の訂正増補を委嘱したことについて論じている。それは、まず、「適材を適処に置くことを得た勇気を賞し、幸福を慶せざるを得ないのである」と評価し、福田が東洋日の出新聞に長崎市史編纂の議を提唱したことは、「最も心を獲たもの」であり、「訂正増補を福田氏に頼むことになったので我が宿願は半ば成就したわけである」と評価している。そのうえで、長崎史はある意味において「西洋文明東漸の歴史」であり、長崎とよその国との交渉を閑却して長崎史を編しようと試みるならば、柱を用いずに家を建てようと努力するのと同じであると指摘し、「四散せる史料を捜羅し、断簡零墨の微も史料に供し得べきものは洽く之を蒐集し、博く我邦の文書を渉猟して英を拾ひ華を抜き、併せて我邦に存せず西洋に遺れる史料を採択して欠漏を補苴したなら、満足な長崎史ができあがるだろう」と、国内の史料だけでなく、海外の史料の必要性も説いている。そして、福田氏が訂正増補する際に、ぜひ鎖国時代における海外と長崎との交渉関係というところに適応の注意を払われんことを希望すると述べている[41]。

これに対して福田も、同誌に寄稿した「支那人の偉業」のなかで、「長崎評論は長崎史につきては余と殆んど同一の見解を持つて生まれて来た、余は嬉しい感に堪へぬ力ある味方が出来たからである」[42]と、古賀への共感を示した。そして、1913（大正 2）年に完成させた『増補訂正幕府時代の長崎』の緒言で、『幕府時代の長崎』を含めた従来の長崎についての正史は「崎陽ニアリテ崎陽ヲ記録詳述シタルニ止リ、長崎ガ近世文明ノ淵叢地タリ、文明東漸ノ門戸タルニ到レルノ記事ハ之ヲ発見スルコト甚ダ尠ク、殊ニ幕末貿易事歴ヲ逸却シタルハ、余ノ深ク遺憾トスル所ナリ」と述べたうえで、「余ノ目的ハ文明東漸ニ対スル崎陽ノ位置ヲ闡明シ」と、古賀が希望した通り、「文明東漸ニ対スル崎陽ノ位置」を明らかにすることを増補改訂の目的にあげている[43]。

さらに、その緒言では、「古賀十二郎氏ガヘンデレドーフ、美馬順三ノ伝記ヲ草シ、且有益ナル助言ヲ与ヘラレタ」と、古賀の協力を得たことも記している[44]。ヘンデレドーフとは、オランダ通詞を指導し、『ズーフ・ハルマ』の編集にあたるとともに、フェートン号事件が起こったときの商館長でもあったヘンドリック・ドゥーフであるが、表 1 で示したように、古賀はすでにドゥーフに関連する記事を『長崎評論』に掲載していた。美馬順三は蘭学を学び、シーボルトの門下生となり、鳴滝塾の塾頭も務め、シーボルトの日本研究のために、その求めに応じて日本の文献をオランダ語に翻訳するなどした人物である。

古賀は、これらの人々の事跡を掘り起こしながら、「我邦に存せず西洋に遺れる史料を採択して欠漏を補苴」する必要性を説き、ケンペルの『日本歴史』の英訳本の一部を紹介するなど外国語文献を読解することで、長崎の海外との交流についての研究を切り開き、長崎研究に欠かせない存在となっていったのである[45]。

また、『長崎評論』第 4 号（1913 年）に掲載された「古色の保存（二)」では、古蹟保存会の規約案の会の目的と実行の方法の項目について、図書館の設立が掲げられているが、博物館の建設の計画がないと批判している[46]。ただし、現在、長崎歴史文化博物館が所蔵する『長崎古蹟保存会趣意書・長崎古蹟保存会規約』の規約第 3 条の 9 には、「図書館及博物館ヲ設置スルコト」とあるので、この古賀の意見が反映されたと思われる（長崎古蹟保存会は前述のように 1913 年 2 月創立）

そして、1913（大正 2）年 10 月、古賀は藤川次郎と共に長崎県内務部長岡田忠彦を会長として、郷土史研究の基礎造りを目的として、長崎史談会を組織した（第一期史談会といわれる）[47]。同年 10 月 18 日付『長崎日日新聞』は、「長崎史蹟研究会」という見出しで「長崎市古賀十次郎（ママ)、藤川次郎其他史蹟に趣味を有する人士らは予て外

国の文明史に関係浅からざる長崎の史蹟に関し研究顕揚の余地少からざるを思ひ同好の士によりて一団体を組織」するために、当日の午後 8 時から出島の内外倶楽部で集会を催し、意見交換すると伝えているので、この「長崎史蹟研究会」が長崎史談会となったと思われる。

その活動の一端は、長崎日日新聞が、1913（大正 2）年 12 月に「会員三十余名の来会あり福田氏島瀬氏等の興味ある史談ありて午後四時過散会せり」（「長崎史談会」12 月 23 日）と伝え、1915（大正 4）年 1 月には、「史談会員古賀、福田[…]の諸氏は和蘭貿易時代の史料蒐集の為め四日北松浦郡平戸に出張せる」と伝えている（「史談会の材料蒐集」1 月 9 日）。これらの記事にある福田とは福田忠昭のことであろう。さらに、1915（大正 4）年 2 月 28 日には、高島秋帆の 50 年祭が長崎史談会と古蹟保存会の共催で開催されたが[48]、当日の新聞は「史談会幹事古賀十二郎氏及び古蹟保存会幹事福田忠昭氏の講演」があると報じている（東洋日の出新聞「本日の秋帆祭」2 月 28 日付）。

これらのように、大正期に古賀と福田は、互いに交流をもちながら、それぞれ古蹟保存会と長崎史談会の中心となり、長崎の歴史研究を牽引する存在となっていったのである[49]。

（３）長崎県立長崎図書館と永山時英

地方改良運動のなかで、社会教育（通俗教育）が「健全なる国民的精神を涵養する」ために奨励されるなか、内務省が「有害な読物」を禁止する一方、図書館は「健全なる読物」を供給することで、「危険思想」から青年を救うことが急務とされた[50]。そこで小松原英太郎文部大臣は、1910（明治 43）年に「図書館ノ施設ニ関スル訓令」で、図書館設立に関する注意事項を示し、その後図書館令施行規則を公布するなど、図書館に関する法令を整備した。これによって全国の公立私立図書館は、1908（明治 41)年度の 199 館（公立 64、私立 135）[51]から、1918（大正 7)年度は 1510 館（公立 877、私立 633）[52]と急増していった。

そのようななか長崎では、1911（明治 44）年の県会で図書館設置が議決され、翌年 6 月に新橋町に県立長崎図書館が開館した。その開館に先立ち、福田忠昭は東洋日の出新聞に寄稿した「図書館に対する希望」（上・中･下、1912 年 3 月 21～24 日）のなかで、「願はくは長崎市の現状に鑑み、其弊風を打破して、一般人士が着実堅固なる思想を養成すべき底の書籍を購入する」（下）ことなどを求めている[53]。図書館開設は、長崎で地方改良運動を主導していた福田にとっても重大な関心事であった。

ただし、この図書館は県有家屋を利用した仮設的なものであったので、李家隆介長崎県知事のもとで、1915（大正 4）年に御大典記念事業として諏訪公園内にあった交親館（元県会議院兼迎賓館）を図書館に改修し、11 月に開館した[54]。この長崎県立長崎図書館の初代館長となったのが、永山時英である。永山は、1867（慶応３）年、鹿児島に生まれ、帝国大学史学科を卒業後、鹿児島尋常中学校教諭となり（1897 年）、さらに、川内中学校校長（1902 年）、第七高等学校遊士館教授（1907 年）を経て、長崎県立長崎図書館長に任じられ、1915（大正４）年 8 月に着任した。

図書館長となった永山は、永島正一によれば、古賀十二郎が、長崎県庁の倉庫から長崎奉行所の記録や明治期の行政資料を図書館に運び込ませると、しぶい顔をして、こんな古いものをとブツブツいっていたが、そのうち十二郎に引きずられて長崎学の病みつきになり、後年十二郎の協力を得て切支丹史料集という大冊を出版して切支丹学者といわれるようになったという[55]。事実、永山が編集し、天皇やローマ法王、オランダ国にも献上された『対外史料美術大観』（1918）の例言では、「本書の編纂に関しては長崎市の篤学古賀十二郎君の援助に負ふ所甚大なり、殊に英文説明の如きは全く君の筆に成る、茲に特記して其盛意を謝す」と、古賀への感謝を述べている。

その後も永山は、キリシタン研究や長崎の対外

関係史の研究に取り組み続け、図書館でキリシタン史料の収集・展示などを行い、1918（大正 7）年に、長崎市会で長崎市史の編纂が決まると、編集参与となり、市史編纂の中心となった（このとき古賀と福田は編集委員となった）[56]。

1919（大正 8）年には、長崎史談会と長崎古蹟保存会が合併して長崎史会が組織されることになり[57]、同年 10 月に開かれた初会合で、伊東巳代治子爵、渡辺長崎県知事、岡田忠彦前埼玉県知事、高島長崎市長らを顧問に委嘱することや、史蹟名勝天然紀念物保存法にもとづく史蹟の指定のため、県から選定について託されれば引き受けることなどを決議した（東洋日の出新聞「長崎史会初会」1919 年 10 月 31 日）。この長崎史会については、後に渡辺庫輔が、第 2 期長崎史談会が結成されたころ、「永山時英の長崎史会」というものがあったと述べており（『長崎民友新聞』「風中放談」(5)1958 年 4 月 23 日）、事務所も県立長崎図書館内に置かれていたので、永山がこの会を主宰したと見てよいだろう。

そして、この翌年、内務省が史跡の指定について、各県で専門家を嘱託し、調査委員会を設け、その決定を内務省に報告するという手続きを示すと（東洋日の出新聞「史蹟保存会要旨」1920（大正 9）年 4 月 30 日）、長崎県は史蹟名勝天然紀念物調査委員会を組織した（1921 年）。その規定では、内務部長を委員長、教育課長を幹事とし、知事が常置委員、書記を命じるか委嘱し、さらに必要があれば臨時委員を置くと定められたが、永山は常任委員となり、職員一覧の常置委員 4 名・臨時委員 10 名の筆頭に名を連ねた[58]。

以後、この調査委員会が各郡市町村からの調査報告にもとづいて実地調査をおこない、最終的に平戸和蘭商館址、出島和蘭商館址、シーボルト宅址、高島秋帆旧宅の史跡指定を申請し、これらは史跡に指定されることになった（1922 年 10 月 12 日の内務省告示で発表）。こうして、長崎史会が発足時に史蹟指定についての協力を決議した通り、同会を主宰した永山が、県の史蹟名勝天然紀念物調査委員会の専門家の中心となり、長崎県の史跡指定の作業が進められた。

また、1920（大正 9）年 4 月に皇太子（後の昭和天皇）が九州巡遊で長崎を訪問したときには、永山は長崎図書館に皇太子を迎え、史料閲覧室で史料についての説明を行い、さらに幕府時代の長崎港の防備について説明するために皇太子の御召艦に同乗し、佐世保まで同行している（東洋日の出新聞「図書館御立寄」1920 年 4 月 3 日、長崎日日新聞「史料を御説明　県率長崎図書館長永山時英謹記」1928 然 11 月 10 日）。

これらのように、帝国大学史学科を卒業し、福田、古賀よりも一回り年長であった永山は、県立長崎図書館赴任後、長崎の歴史研究の中心的な存在となり、図書館がその拠点となっていった。

その一方永山は、その死去を伝える長崎日日新聞の記事で、「長崎地方におけるキリシタン文明の闡明に力を尽し、又報徳会其他社会教育事業に尽瘁し、文部省、県、市等より数次表彰さるゝなど、長崎の史界、教育界の重鎮となつてゐた」（「永山図書館長　けさ、西山町の自邸で死去」1935（昭和 10）年 2 月 7 日）と、歴史研究とともに、社会教育事業への貢献が評価されている[59]。

図書館長としては、『図書館雑誌』に掲載された「時勢の変遷と国民教育制度の変更」という論考のなかで、普通選挙時代には、国民全体に穏健な批判力が必要で、国民の一人といえども無教育無思慮のものたるを許さぬと述べ、その背景として「野心家が詭弁を弄して民衆を扇動するの機会が益多くなつて来る。種々の魔の手が四方から窺ひ寄つて国家を亡滅の淵に導かんと試みる」という認識を示している。そして、国民教育の程度を高め、民衆一般に穏健な常識をもたせるには、義務教育だけではできないので、学校が国民教育の基礎を作り、図書館が仕上げる任務に当たることを主張し、図書館に「良書を精選して豊富に之を備へ置き、之を一般に紹介すると同時に、簡易なる

方法を以て一般民衆に貸出すことになれば殊更らに多額の金を投じて悪書を購読する人は自然少くなるから、悪書は遂にその影を潜むることになる」と説いている[60]。

これは、内務省による「有害な読物」を禁止する一方で、「健全なる読物」を供給することで、「危険思想」から青年を救うとした方針に沿うもので、永山も、このような国民の「思想の善導」が図書館の重要な役割と考えていたのである[61]。

また、永山は、死亡記事にあるように報徳会に所属していたが、これは内務官僚を中心に半官半民団体として設立された団体ではなく、鹿児島出身の花田仲之助が 1902（明治 35）年に結成した道徳教化団体である。永山によれば、同会は、「我が日本帝国の国民道徳は皇祖皇宗が国を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚に渡らせられた自然の結果として生れ出でた忠孝の精神、即ち知恩報徳の精神を基礎とする道徳であつて、畏けれど教育勅語は此の国民道徳を成文とせさせられた御教である」として、「教育勅語の普及徹底を唯一の目的とするもの」であった。その設立時、永山は鹿児島第一中学校に勤務しており、当初、会に出席したのは「先生に対する一種の義理的行動」であったが、やがて「先生の徳行に心服し知らず識らず感化され[…]報徳会といふものは何時しか先生の仕事と思はないやうになり、自分自身の天職であると考ふるやうになつた」と述べている[62]。

このように、永山は、長崎の歴史研究とともに、図書館運営を通じて「思想の善導」を図り、報徳会で（内務省が関わった報徳会とは立場が異なるが）「日本帝国の国民道徳」教化に尽力した、長崎での地方改良運動の積極的な推進者であった[63]。

（4）武藤長蔵の歴史研究

福田や古賀、永山らとともに、大正から昭和初期の長崎史研究を代表する人物とされるのが、長崎高等商業学校教授であった武藤長蔵である。武藤は 1881（明治 14）年に愛知県で生まれ、名古屋商業学校を経て東京高等商業学校に進み、その専攻部貿易科を修了後、1905（明治 38）年に上海の東亜同文書院に赴任した。そして、ここで 1 年余り勤務した後、1907（明治 40）年に長崎高等商業学校に教授として着任すると、その後は同校で研究と教育に取り組み、1936（昭和 11）年に退官した後も講師として同校で勤務を続けた。その間 1911 年から 3 年半、アメリカ、イギリス、ドイツに留学し、帰国後は、武藤の遺稿集を編纂した山田憲太郎によれば、経済学史、鉄道論、殖民政策、交通論、日支通商史の講義を担当し、それぞれについての研究を発展させたが、それらの研究は、どれも交通の意味を広く解釈し、長崎という土地を中心として、関係史料文献は最大漏らさないという書誌学的研究を根幹として進められたという[64]。

武藤と長崎史研究との関わりについては、武藤自身が、東京高等商業学校の同窓会「如水会」に寄稿した「恩師を偲ぶ」のなかで述べている。それによれば、長崎高商赴任後は商業通論や鉄道論を担当し、海外留学中も鉄道論や交通論、市営問題、都市問題の資料を収集したが、第 1 次世界大戦と長崎でのあまりに長い生活のなかで、その研究や公表が遅れることになり、長崎にあって対外関係の歴史を研究しようとする志をいだくようになったという。そして、その理由を、若いときに横井時冬と福田徳三から受けた商業史、経済史などに限らず、歴史的研究の興味を持っていたためと語っている[65]。また、武藤が京都帝国大学の浜田耕作の追悼録に寄せた「浜田耕作博士の追憶」のなかでも、「歴史に対する私の興味は、本来の性質の外に、横井時冬・福田徳三両先生の感化、当時勃興しつつあった経済史研究の気運、京大の内田銀蔵博士の講義筆記、それに浜田君の影響等があったことを深く感ずるのである」と回想している[66]。

これらのなかで、武藤が感化を受けた人物として名前をあげている横井時冬は、武藤と同郷であることからその副保証人ともなっており、武藤は

「第一に恩師として私の偲ぶ方は、文学博士横井時冬先生である」[67]とも述べている。夏目琢史によれば、横井は「内国商業史取調係」として高等商業学校に就職し、菅沼貞風、土子金四郎とともに研究調査に取り組んだのを出発点として、日本商業史研究の先駆者となった歴史学者とされる。その歴史研究については、横井が中学生向けに叙述した『国史攬要』（1903 年）の末尾で、「我邦人相戒めて、国家の実力を養成し、国運の進捗と共に国威の発揚を努むべきなり」と記したように、「当時の国家的要請に応えるべく迎合的性格のものであったことは疑いようのない事実」という。そのため、「今日の歴史研究からみれば、時冬もつ歴史像は殖産興業をめざす明治国家の政治的な要請を受けた植民地主義的側面と、国学の教養に支えられ愛国主義的色彩を持ち合わせた、極めてナショナリズム的色彩の強い歴史学と判断されてしまうかもしれない」が、それとともに、「大きな歴史像を胸に抱き、緻密に資料を蒐集し、それに基づきながら一つ一つの史実を実証していく歴史叙述のスタイルがあった」と評価されている[68]。

この横井の歴史研究からどのような感化を受けたのか、武藤は語っていないが、山田憲太郎が指摘している、武藤の関係史料文献は最大漏らさないという姿勢は、資料の収集と実証を重視した横井の影響とも考えられる。ただし、山田によれば、その「研究はあまりにも微にいり細をうがち、引用、脚注、追記、再注、補論とあって、立論の本旨がどこにあるのか疑われる程」であったとされる[69]。このような研究のために武藤が収集した約 1 万点以上の書籍や地図, 書画, 陶器などの資料は、現在、長崎大学附属図書館経済学部分館が所蔵する武藤文庫に残され、そのなかには、多くの日蘭・日英貿易、幕末長崎関係史料が含まれている。

また、武藤と永山時英や福田忠昭、古賀十二郎とは、1918、19 年頃から親交がはじまり[70]、1928 年（昭和 3）5 月に第 2 期の長崎史談会が設立されると[71]、この 3 人とともに顧問となり、その機関誌となる『長崎談叢』創刊号には「日支吉利支丹史料比較の必要」という論考を寄せている。

このように、長崎で、長崎史研究に取り組み、多数の長崎関係資料を収集し、交友関係を深めていった武藤は、「終生、長崎を愛し、長崎高商を愛し、書誌学を愛好した」と評され[72]、「高商の名物」で、長崎史研究の中心的な活動を担う郷土の名士として知られるようになっていった[73]。

では、長崎史研究を共に担った福田や古賀、永山は、郷土の歴史を通して愛郷心・愛国心を高揚するなど国民教化を強く意識していたのだが、武藤も同様の意識をもっていたのだろうか。武藤の国家意識や歴史意識については、武藤が晩年に関わった菅沼貞風の『大日本商業史』復刊の取り組みのなかに見ることができる。

『大日本商業史』は、古賀が歴史研究を志すきっかけとなった本であるが、1930 年代には絶版となっていたため、菅沼貞風の没後 50 年（1939 年）を前に、佐世保商工会議所会頭であった北村徳太郎が、1937（昭和 12)年に佐世保で江口礼四郎らとともに菅沼貞風氏遺著刊行会を結成し、同書の復刊に取り組んだ。これは、その前年（1936 年）の 7 月に、室伏高信の『南進論』（日本評論社）が出版され、同年 8 月の広田弘毅内閣の五相会議で決定された「国策の基準」で、「南方海洋殊ニ外南洋方面ニ対シ我民族的経済的発展ヲ策シ」と「南進」が示され、日本国内で南進論が高まるなかでの事業であった。

これに武藤が関わったのは、北村の依頼で『大日本商業史』を校訂した江口礼四郎が同書を携えて武藤を訪問したことにはじまる。江口によれば、そのとき武藤は、「あゝさうですか、北村さんが発起して下さるんですか、本当に嬉しいことです、私に出来ることは喜んで御引受します…」と答えて、『大日本商業史』の刊行会を讃え、幾多の著書を指示し、あらゆる角度から貞風を論じ、『大日本商業史』を説き、2 時間にわたって熱弁をふるったという[74]。その後武藤は、校訂本を幾度も読み返

すなかで、もっと厳密な校訂を加えて出版するべきと感じ、上京して岩波書店と出版の交渉をするとともに、東京帝国大学文学部史料編纂所の編纂官に校訂者を依頼するなど尽力し[75]、復刊した『大日本商業史』（岩波書店、1940 年）の冒頭に掲載された写真のキャプションや例言、跋を執筆した。

その跋文について、山田憲太郎は、「菅沼貞風の帝国大学時代の学習から、何故に彼がわが国の商業史を始めてまとめようと念じるにいたったのか。彼の前後にわが国に伝えられた英国商業史の諸本、その翻訳、その講述など、いわゆる“ムトウイズム”を中心とする明治 20 年代の、わが商業教育（学科とくに商業史）と書誌の研究に流れ、あやしいまでも菅沼貞風がヒントを得たであろうという“武藤”一流の類推がそれからそれへと重ねられ」[76]と、武藤らしさが貫かれた論文と評している。

ただし、跋文のなかで武藤は、名古屋商業学校時代に転校してきた学生が持っていた『大日本商業史』に接して、「最も感奮したのは、その巻頭を飾る福本日南氏の文章である。否、菅沼貞風その人の人物である」と、巻頭の「菅沼貞風君伝」[77]に感銘を受けたことや、東京高等商業学校時代に横井時冬から、その同僚であった菅沼貞風の話しを聞いていたことも回想している。そして、『大日本商業史』の復刊にあたって、旧版にはなかった「変小為大 転敗為勝 新日本図南之夢」を加えたことを記している[78]。

「新日本図南之夢」とは、菅沼が 1888（明治 21）年に書いた当時は未刊行の遺稿で、「吾人果して東洋を連結するの雄図あらば我国をして之が中心の機軸たらしむるの奇策なかるべからざる也。[…]内には支那と勢禁形成して我国の頤使に服従せざる能はざらしめ、外には白人を挫折して其跋扈の気を沮喪せしむるに足らしむるには、民を海外に植し、地を宇内に拓くの外また其策なかるべし。[…]吾人は意謂らく、我国の盛衰興廃は実にこの新版図を開くと否とに決するものなりと」と主張し、フィリピン支配についての具体策や、日本が「東洋の覇国たる」ための構想などが語られている[79]。

武藤は、これを新たに掲載することにした理由を、「菅沼貞風氏の歴史家として、また志士として、日本男子として、一つの理想を筆にしたものである。これは実現すべからざる空想なるやもわからぬけれども、骨を異郷に埋めた菅沼氏の志を後世に伝える上において、欠くべからざるものであると思う」と記している。そして、「私は絶版となったこの書が再び世に出でて、新東亜の建設、また南進論者その他、国策を論ずる人びとの参考となり、歴史家以外、軍人、実業家、教育家、政治家等、広く社会に読者を得んことを希ふものである」と訴えた[80]。

菅沼貞風氏遺著刊行会が結成された翌年の 1938（昭和 13）年には、近衛文麿内閣が「東亜新秩序」の建設を表明し、『大日本商業史』が復刊され、「新日本図南之夢」を世に出された 1940（昭和 15）年には、近衛内閣が作成した基本国策要綱では、日本・満州・中国に南洋を加えた「大東亜新秩序」建設が掲げられ、南進の気運はさらに高まっていた。そして、1941（昭和 16）年 12 月に日本軍がアジア太平洋各地に侵攻を開始し、アジア太平洋戦争がはじまるなかで、『大日本商業史』は版を重ね、菅沼貞風についての伝記も相次いで出版され[81]、「新日本図南之夢」は単独で岩波文庫から出版（1942 年）されていった。武藤が期待したように、これらの書は、「新東亜の建設、また南進論者その他、国策を論ずる人びとの参考と」なっていった。

そのなかで、江口礼四郎による『菅沼貞風伝 南進の先駆者』（八雲書林、1942 年）に序を寄せた武藤は、菅沼について、「彼が一個の迂遠なる学究に止まらなかつた事は「大日本商業史」及「平戸貿易志」の二篇の外に「新日本の図南の夢」がよく之を證明して居る。彼が如何に活眼者であつたか時務を解したか、外交移植民、財政、人口問題等に識見を有したか、歴史家として真によき素質を備へて居つたかは立證されたものと思ふ。この度大東亜戦争に於てマニラ陥落の報伝わるや、故

人菅沼貞風氏を今更ながら偲ぶ人多きは蓋し当然である」と記している[82]。マニラが日本軍によって占領されるなかで武藤は、いち早く菅沼を高く評価し、「新日本図南之夢」を世に送り出した自らの先見性を確認したようである。

そして江口は、平戸で開催された『大日本商業史』刊行記念の講演で、病気であった武藤は蒼白な顔で眼に涙さえ含んで、「私は今日の講演には、会場で死んでも満足だと家内にも言って出て来ました」と語って聴衆に感動を与えたと記し、「斯うした学者的な良心と国士的な熱とに対して私共は衷心からの感謝を捧げる」と、武藤をたたえている[83]。

武藤も、徹底して考証を重視するとともに、恩師の横井時冬と同様、植民地主義的側面と愛国主義的色彩を持ち合わせた研究者であった。

4　開港記念日をめぐる論争

長崎商工会議所は「海の長崎を記念し、そして海によって生きて来た長崎市民の古きを温ね、併せて将来を祝福する為に」、開港記念日を定めることとし[84]、1929 年 2 月から 1930 年 2 月にかけて、古賀十二郎、福田忠昭、武藤長蔵、永山時英の 4 名に選定を委嘱した。この 4 氏からは、1930（昭和 5）年 2 月までに次のような回答が寄せられた（要旨のみ）[85]。

古賀十二郎：　元亀元年 3 月 16 日がふさわしい

長崎開港記念日としては、開港記念を証明し、動かすべからざる根拠を有する史実に依りて決定すべきもの。

①長崎（長崎甚左衛門の城下長崎村に非して、現在の長崎）創始の観念

②海の長崎としての観念

③創始当時の困難の観念

等の条件を具備した史実を発見すれば、それに依拠して記念日を決定すべき。そこで次の時日を記念日に適当せるものとして選択した。

元亀元年三月十六日　長崎村を引揚げて、今の県庁より本博多町と新町境方面一帯の地に要塞を構えた長崎人が深堀勢を撃退した日。この決勝は新長崎の基礎石ともいうべきもので、最も適当なるものと考える。

長崎人が要塞を構え、深堀勢を撃破したことの根拠は、ルイス・フロイスによる『日本歴史』と深堀の領主深堀氏の古文書を記した『深堀系図証文記』で、その内容が一致していることから日時を確定し、採用した。この史実については、すでに『長崎志正編』(昭和 3 年) の付録に記事を載せ、熊本のラジオ放送でも発表しており、さらに、『開港文化』（注：正しくは『開国文化』）に掲載した「海外交渉中心地としての日本」にも記載した[86]。

永山時英：　天正 16 年 4 月 2 日（陽暦 4 月 27 日）

豊臣秀吉が長崎を天領とし、鍋島信生を代官に任命した日

ポルトガル船が入津して初めて貿易したのは、元亀 2 年であるが、これは大村氏が勝手に許したもので、国家が公認したものではない。国家が長崎を対外貿易を認めた天正 16 年 4 月 2 日とすべき。

福田忠昭：　元亀 2 年 3 月 3 日

①開港記念日は長崎港が開港された年月日を以ってすべき。

②開港したのは長崎を大村純忠が領有し、長崎甚左衛門が地頭であった時代であるが、大村純忠がポルトガル人に公約した年月日は明らかでない。

③大村純忠は元亀 2 年 3 月、長崎に 6 町を新設して貿易に備えた。

④以上から実際に町建をした年月を記念年月とし、記念日は其の月の適当な日でよいが、新暦に換算して 4 月とし、神武天皇祭日の 4 月 3 日でもよい。

武藤長蔵：元亀 2 年 3 月または 4 月の適当の日（例えば神武天皇祭の 4 月 3 日）

①元亀元年にポルトガル船が長崎に始めて入津したことを記した旧記があるが、ポルトガル船の来港はそれより旧いという説もあり、長崎縁起略には永録 10（1567）年に異国船が長崎に来たという記事があり、外国船の長崎来航の最初の年は決定し難い。だから長崎の市街の成立した年を以って開市または開港を記念すべき年とみるべきである。

②古賀十二郎が論じたように長崎創始の観念を基礎として記念日を定めようとする説に同感だが、元亀元年 3 月 16 日は深堀勢との戦争の記念日であり、長崎開港の記念日ではない。長崎の町割を定めた元亀 2 年 3 月を記念すべき年月とすべきと信じる。その日付は不明。

③天正 16 年 4 月 2 日に豊臣秀吉が長崎を天領とし、鍋島信生を代官に任命したのは歴史上の重要事件であるが、これを長崎開港記念日決定の論拠にしようとする永山時英の説には服し難い。長崎に限らず平戸なども外国と通商したのは史的事実と認めざるをえないが、永山氏の論法では仮に平戸の開港を記念しようとした場合にはどうするのか。

④以上のことから元亀 2 年の陽暦 3 月または 4 月とし、適当の日、例えば神武天皇祭の 4 月 3 日を選んではどうか。また、森崎祭礼の 3 月 9 日をとって 3 月 9 日とするのも一つの考え方と信じる。

これらの回答をもとに、商工会議所は長崎市役所と相談し、1930（昭和 5）年 3 月 7 日、この 4 氏とともに市の助役や商工会議所副会頭らを招き、第 1 回開港記念日協議会を開いた[87]。そこでは、まず永山が、「記念日ハ不愉快ナ日デハイケナイト思ヒマス。古賀君ノ説ノヤウナ外国人ガ占領シタヤウナ日デハイケナイト思フノデ、秀吉ガ天領トシテ認メタ四月二日ヲ相当デアルト思フノデス」と古賀の説を批判して自説を述べた。

この後、福田は前記の自説を主張し、武藤は、「港トシテノ関係ニ重キヲ置ケバ、当然今ノ県庁附近一帯ヲ長崎ノ発祥地トセネバナラヌシ、都市発達ノ経路トシテモ相当ノ理由ガアルカラ、コノ意味デ古賀君ノ説ヲ私ハ妥当ト思フノデアリマス」と古賀の説の妥当性を認めながらも、深堀勢を撃退した時を記念日とすることについては相応しくないとして、福田と同様の町立ての時を記念日とすることを主張した。

一方、古賀は、「当時県庁ノ下ハ地理的ニ非常ニ不便デアツタノダガ、当時ノ長崎人ハ此困難ト戦ヒ、不便ヲ忍ンデ開拓シタ、茲ニ長崎創業ノ苦心ガ偲バレルノデアツテ、此ノ点コソ最モ吾々ガ永久ニ記念シ、子孫ニ伝ヘル必要ガアラウト思ハレル」と主張し、永山の説を長崎代官となった「鍋島家ノ提灯持」のようで、元亀 2 年説も今の所「伝説的ナ旧記ノ説」と批判した。さらに武藤も、「国家ガ長崎ヲ天領トシタト言フノハドウカト思フ。秀吉ガソウキメタダケダカラ」と批判すると、永山は「秀吉ナカリセバ今日ノ長崎ハ発生シナカツタト思フ」と述べ、「国家的ニ考ヘレバ僕ノ説デナケレバナラナイ」と自説の正統性を強調した。

これに対して古賀は、永山の説を「余リニソレハ内国的」と批判し、「長崎トシテハ国際的ニ考ヘナケレバイケナイダロウ」と主張すると、武藤も「長崎トシテハ国際的デナケレバナラナイ」と古賀に同調的な立場をとった。さらに古賀は、「創始者ノ苦難ハ地理的ニ不便ナ県庁ノ下ヲ開拓シテ、新シイ長崎ノ基を打建テタ点に於テ、又深堀勢ニ対シ身命ヲ賭シテ長崎ヲ守ツタ犠牲ノ精神ニ於テ、私ノ挙ゲタ日ガ記念日トシテノ条件ヲ備ヘテ居ル」と主張した。

すると、永山は、「古賀君ノ云フ要塞ハ伴天連ガ主トナツテ築イタノデ、後々葡萄牙人ガ占領スルヤウニナツタノダカラ」、「切支丹ノ記念日トスルナラバヨイガ」と批判したが、古賀が「伴天連ガ

主トナツテ築イタノデハナイ。ソレニ宗教ノ自由モ許サレタ今日、伴天連ガ加ツテ居タカラト言ツテ攻撃スルノハアタラナイ」と反論し、「長崎ハ国際的ニカンガエネバナラナイ」と繰り返すと、武藤もこれに同調した。

しかし永山はあくまで、「国家的ニ考ヘレバ僕ノ説デナケレバイケナイダロウ」と主張し、古賀と武藤を「君タチガソウイウ風ニ国家的ニ見ナイノハ思想ガ悪化シテル証拠ダ」と咎めた。すると、武藤が、古賀の主張する戦勝の日を記念日とすることについて、「永山君ト同ジク不快ナノデ、僕ハソレヨリモ元亀二年ノ町立ヲ記念日トスベキモノト思フノデ、ソノ点ハ福田君トモ相談シテ会議所ニ返事ヲシテ置イタ」と、あらためて町立ての日を主張し、これに続いて福田も「兎ニ角開港記念日ヲ町立ノアツタ元亀二年トシ、色々ノ事情カラ三月ヲ四月トシソノ月日ガワカラナニノデ、私ハ神武天皇祭ニデモト思ツタノデスガ」と述べた。

こうして、第１回協議会では４氏の意見の一致をみることはできなかった。つまり、長崎の開港の日をめぐる議論は、なにをもって「開港」と見なすのかを明確にできないために、4 人は長崎甚左衛門が支配していた長崎村とは区別された開港場としての長崎の成立を長崎の開港と位置づけようとしたのであるが、開港場としての長崎の成立についても、その始まりを明確にすることは困難であった。

そのため、武藤と福田は、大村純忠と長崎甚左衛門による長崎の町立に長崎の成立を求め、古賀は町が建てられ、要塞化し、これを中心に周囲の軍事的な脅威を払拭したことで、開港場としての発展の基礎が確立したとして、その時を長崎の成立と主張したのである。これらに対して、永山は豊臣秀吉が長崎を天領としたことに長崎の成立を求めた。

この開港記念日の制定は、多くの市民を集める地域振興のイベントを開催することを目的としていたが、意見を求められた 4 氏にとって長崎の開港の日を確定するということは、それぞれの知見とともに歴史観や国家観が問われたといえる。

永山は、『長崎と海外文化』上編のなかで、「長崎開港の当時来たり集つた人々も総て吉利支丹であつたと断定しても敢えて過言ではあるまい」と開港場としての長崎建設に集まった住民がキリスト教徒であったと指摘し、宣教師は「その住民に対しては、精神界の支配者であつた」と述べている[88]。この立場から永山は、古賀が主張する長崎に移り住み、開港場としての長崎の基礎を築いた住民が勝利した日は、「不愉快ナ日」、「外国人ガ占領シタヤウナ日」であり、「切支丹ノ記念日トスルナラバヨイガ」、この日を長崎の成立とすることを、「思想ガ悪化シテル」と見なしたのである。

当時の日本では、江戸時代からのキリスト教を邪教視するキリスト教観は引き継がれており、また、内村鑑三が「教育勅語」の奉読式で最敬礼しなかった「不敬事件」に見られるように、天皇を神とする皇国日本という国家主義の立場からキリスト教を反国家的とする警戒感もあった。長崎公教神学校校長であった浦川和三郎は、その著書『切支丹の復活』後篇のなかで、1920（大正 9）年に浦上天主堂に建てられた、明治政府によるキリシタン弾圧（浦上四番崩れ）を記念した「信仰の礎」の記念碑の裏面に、流配地と流配された信徒数、流配地における死亡数を記入するはずだったが、県当局を始め警察は言を左右にして許可しなかったことを指摘し、その理由を浦上信徒が明治政府に怨恨でも懐いていると誤解したものであろうと述べている[89]。さらに、昭和初期のガイドブック『長崎の史蹟と名勝―雲仙と其附近並に諫早地方』（1932 年）では、浦上天主堂を紹介するなかで、浦上のキリスト教徒について、「現に彼等は市民から「クロ」と賤称されて居るが、これは徳川幕府の切支丹に対する圧迫政策から生まれた侮蔑精神の現はれが尚残つて居るものである」と記されている[90]。

このようななかで、キリシタン研究で知られる

一方、教育勅語で示された知恩報徳の精神を基礎とする国民道徳の普及徹底の活動に熱心であった永山にとって、キリスト教徒やその宣教師が　開港場としての長崎を建設したという歴史は認められなかったのであろう。

そこで、永山は長崎の開港を「国家的ニ考ヘ」るために、親交のあった長崎高等商業学校教授の川島元次郎の説を参考にしたと思われる[91]。川島は、その著書『長崎史蹟名勝案内』のなかで、「開港の初より天正十五年に至る迄十七年間は地方の一諸侯が私に開いてもっぱら葡国人に対して私貿易を営んだところであつた［…］天正十五年に於て天下の公領として長崎港を公に開港場としたといふことは其の主義に於て世界的開港場としたのである、決して葡萄牙一国を対手としたのではない［…］此の政策は徳川幕府により手も継承せられ［…］通商貿易の為に公開せられて居たのである」[92]と記している。国家的に考えようとする永山にとって、地方の諸侯が私貿易を始めた時よりも、川島が主張した、豊臣秀吉が天領化した日こそが長崎の開港の日にふさわしいとされたのであろう。

この永山に対して、古賀と武藤は、豊臣秀吉を起源とすることは「内国的」であり、長崎は「国際的」でなければならないと主張した。それは、早くから長崎と海外との交渉に関心を寄せ、海外の史料を読み解く必要性を主張していた古賀や、欧米に留学し、外国の文献を含めて「関係史料文献は最大漏らさないという」姿勢で研究していた武藤にとっては当然のことであったといえる。

さらに古賀は、1925（大正 14）年に完成させた『長崎市史風俗編』の序説で、開港場長崎の成立について、永録 10 年に大村純忠が長崎をキリスト教宣教の根拠地とするとともにポルトガル貿易の中心地とするために、口之津にいたイエズス会の宣教師に書簡を贈り、長崎に教会堂を建立することを申し出たところ、宣教師はこの申し出を受け入れ、ただちに当時天草に滞在中の宣教師にこの事を伝え、長崎を開拓させることにし、同時にポルトガル商人たちも長崎に落ち着くことになったと述べており、開港場長崎の開拓は大村純忠の依頼を受けた宣教師によるものであったとする見解を示していた[93]。

また、武藤は、開港場長崎の成立についての著作はないが、「日支吉利支丹史料比較の必要性」（『長崎談叢』第 1 輯）では、「近来我国にて吉利支丹史研究が漸く盛んならむとしつゝあるのは喜ぶべき現象である。而して、日本吉利支丹史は日欧交通史研究上重要なる一方面とも観る事が出来る」[94]と、日本とヨーロッパの交通史という国際関係のなかで、キリスト教が重要な役割を果たしていると認識していた。この点から「国際的な」長崎の成立に、宣教師やキリスト教徒を見い出すことはむしろ当然であったといえる。開港場としての長崎の成立における宣教師やキリスト教徒の存在は、むしろ欠かせない存在であった。

ただし武藤は、協議のなかで、古賀の長崎創始の観念を重視する説に共感し、長崎を「国際的」に見るという点で一致しながらも、古賀が主張する戦勝の日を記念日とすることについては「不快」と反対し、福田とともに大村純忠による元亀 2 年の町立を開港場としての長崎の成立と見なしている。それは、長崎の成立について、その建設に集まった宣教師やキリスト教徒よりも、その町割によって都市としての整備を始めた大村純忠をその主体と見なそうとしたといえる。つまり、古賀と武藤は、宣教師やキリスト教徒の存在を長崎の「国際性」の証しと見なした点では一致したが、長崎成立の主体として、宣教師やキリスト教徒とキリシタン大名大村純忠のどちらを中心に描き出すかという点でくいちがいを見せたのである。

ただし、古賀も協議のなかで、開港場としての長崎建設の主体は、「伴天連ガ主トナツテ築イタノデハナイ」と宣教師の主導性を否定し、「当時ノ長崎人ハ此困難ト戦ヒ、不便ヲ忍ンデ開拓シタ」と、キリスト教徒としてではなく、あくまで「長崎人」と主張している。古賀と武藤は、宣教師やキリス

ト教との関係から長崎を「国際的」に考えたが、彼らが語る長崎史もやはり皇国日本のなかの長崎人の歴史であった。

5　開港記念日の決定

開港記念日の制定についての第 1 回の協議会では、意見が対立し、結論を出すことができなかったので、それから約 1 ヶ月後の 1930（昭和 5）年 4 月 2 日に、税関長や内務部長、学務部長、市助役、商工会議所副会頭、県会副議長ら 20 余名が出席し、第 2 回の開港記念日協議会が開催された。そして、出席者一同が 4 氏の意見をもとに熟議の結果、長崎開港の年は元亀 2 年（1571 年）、月日は陽暦 4 月 27 日と決定した[95]。

この決定について、福岡日日新聞は、武藤と福田が欠席したため、古賀と永山の討論が行われたが、「結局永山氏説を採用することになり、愈々本園を以て開港三百六十周年となし毎年四月二十七日を長崎開港記念日と定る事に決定」と伝えている（「開港記念日は四月廿七日と決定　本年を開港三百六十周年と定める」1930 年 4 月 3 日）[96]。また、長崎日日新聞は、開港記念日の決定とともに、本月二十七日に記念祝賀会を催すことになったと式典の実施予定まで報じている（「長崎開港 記念日決定 廿七日に祝賀会挙行」1930 年 4 月 3 日）[97]。

永山が主張した日が採用されたことについて（永山は天正 16 年の陽暦 4 月 27 日と主張していたので、あくまでも採用されたのは月日のみ）、『第一回長崎開港記念会記録』には、長崎町割及びポルトガル定期船入津の年を記念し、月日は「色々の都合」から定めたとのみ記されているが、第 2 回開港記念式典のときに永山は、商工会議所でおこなった「長崎の開港と開港記念日に就いて」と題する講演で、その根拠について触れている。そこでは、元亀 2 年のポルトガル船初入津の日を以って記念日とすることが穏当であるが、その日を知ることができず、何等関係ない日を記念日に定めるのは無意味なので、協議の結果、長崎が豊臣秀吉によって公認の貿易港となり、鍋島信生が長崎代官に任命された天正 16（1588）年の 4 月 2 日を陽暦に換算した 4 月 27 日を開港記念日に定めることになったと説明している[98]。つまり、記念日を決定するうえで、ポルトガル船が入津した元亀 2 年を開港の年としながら、豊臣秀吉が長崎を天領とし代官を任命した日を記念日とするという極めて妥協的・折衷的な解決が図られたのである[99]。

そして、この記念日を決定した当日、長崎日日新聞が報じた記念祝賀会に向けて開港記念会創立委員会が組織され、7 日には第 1 回開港記念会創立委員会が開催され、これ以後、会則の制定や事業計画が決定されていった。会則では、開港記念会の目的は、「長崎ノ開港ヲ記念スル為メ適切ナル智識ノ普及ト共ニ長崎市海外貿易ノ発達及商工業ノ振興ヲ図ルニ必要ナル事業並ニ之ニ附帯スル事業ヲ行フ」（第 1 条）[100]とされ、長崎商工会議所会頭が会長となり、商工会議所に事務所を置き、準備が進められた。そうして、長崎県知事と長崎市長を名誉顧問となり、4 月 27 日に開港記念式と祝賀会が開かれたが、これらに加えて、貿易展覧会や記念講演会、旗行列、港の映画大会、長崎振興座談会、開港記念各市大売出しなどの催しも開催された[101]。

『第一回長崎開港記念会記録』によれば、永山、武藤、古賀に開港史実の提供を依頼したのが 1929 年 2 月から 3 月であり、1930 年 2 月に福田にも同じ依頼をし、会議所がたびたび回答を求めた結果、同年 2 月 24 日にようやく 4 人からの回答がすべてそろった。さらに、会議所は 1930 年 2 月 18 日に大阪、神戸、横浜、函館など 8 都市の商工会にも開港記念日の有無を照会していたが、そのすべての回答がそろったのは第 1 回開港記念日協議会が開催された 3 月 7 日であった[102]。

この協議会について、後に渡辺庫輔は、自分が昭和 2 年に商工会議所に入る前から理事の鈴木包教氏が「開港記念日」を目論んでおり、開港記念日について永山、武藤、古賀にお知恵拝借の依頼

をしていたが返事がこないので、渡辺が福田を追加し、4 人に資料をプリントして集まってもらったと述べている。さらに、開候記念日についての協議会では、4 人の議論がまとまらず、これではキリがないので、ひとまず 4 人の学者を別室に押し込み、実際問題について協議し、元亀 2 年（1571 年）、ポルトガル船が長崎に定期航路をひらいたときをもって開港の年とする」ときめ、4 人を別室から出して意向を問うたところ、先生方は異議なしとなったと語っている（渡辺庫輔「風中放談」10、長崎民友新聞 1958 年 4 月 29 日）。

これらから、長崎市や商工会議所は、1927 年頃から開港記念日の構想をもっており、1929 年 2 月頃からそれを具体化しようとしており、1930 年 3 月初めに古賀らの意見と各都市の情報がそろうと、それから 1 か月足らずで、長崎開港の年と開港記念日を確定し、記念イベント開催に向けて 1 週間足らずで開港記念会を設立、それから 3 週間足らずで記念イベント当日を迎えたことになる。しかし、記念日の決定から記念イベントの開催まで 1 か月足らずであったことや、4 人の学者を別室に押し込み、実際問題について協議して記念日を決定したという回想を考え合わせると（ただし、渡辺の回想は 1 回目と 2 回目の協議会を混同している可能性がある）、開港記念日の行事や催しは、記念日を決定する前から、1930 年を長崎開港 360 年として、同年春ごろのイベント実施に向けての準備が進んでいたと思われる[103]。

この時期、日本では、大正末期の不況と世界恐慌のなかで、外客誘致のための観光政策が推進されはじめており、長崎でも、雲仙の国立公園指定を求めるなど観光の振興に取り組みはじめていた。1929（昭和 4）年 10 月には、長崎商工会議所と長崎市の後援で設立された宮日振興会と諏訪の市協会が、諏訪神社の大祭を内外に紹介宣伝し、来遊客を誘致し、522 店が参加した全市商店連合景品附売り出しを開催した[104]。そして、1930（昭和 5）年 3 月には、長崎観光誘致協会が設立されている[105]。

このように、長崎商工会議所や長崎市は観光に期待し、地域振興のイベントを推進しており、記念日制定の第 1 回の協議会では、永山も古賀の 3 月 16 日説に対して、その頃は「アイニク学校ノ試験中デハアルシ、モウ少シ陽気デアツタ日ガヨイ」と述べ、司会をしていた会議所理事も、永山の 4 月 2 日説について、「ソノ翌日ガ神武天皇祭デ二日続クノハ一寸都合ガ悪イヨウデスガ」と集客に配慮したような発言をしている。そして、古賀も、「学校ノ試験ナドデ記念日ヲ盛大ニスル意味デ不便ナラ、諏訪神事ナドモ一月遅レトナツテ居ルカラ、コレヲ一月延シテ四月十六日ニ改メテモヨイ」と述べている。さらに、「ソレ相応ノ確実ナル史的根拠ヲ必要トスル、ヨイ加減ノ日ヲ選定シテ置クト、何故ニ其日ヲ選ンダカヲ説明スル事モ出来ナイシ、後世史家ノ物嗤ヒニナル事ダカラ、慎重ノ注意ヲ要スル」としながらも、「ソノ採用不採用ハ記念日選定委員ガ決メル」と柔軟な姿勢を示していた。

こうして決定した開港記念日に開催された第 1 回の記念式典では、開港記念会長の松田精一が式辞で、長崎の開港について次のように述べている。

> 当時葡萄牙人ノ東半球ニ於ケル活動ハ漸ヲ追ヒテ極東日本ニ及ビ遂ニ西海ノ一寒村タル長崎村ニモ亦耶蘇会士ノ教会堂ノ創建ヲ見ルニ至レリ時恰モ吾邦ハ戦国時代ニ在リテ大村氏領長崎村モ亦ソノ惨禍免レ難ク避難民ハ海浜ノ一岬角ニ移リテ要塞ヲ設ケ防禦ニ努ムル事約半歳ニ及ビシガ元亀元年三月長崎氏ノ城郭民家教会堂等悉ク兵火ノ為メニ焼尽スルニ至リシモ新要塞ニコモレル避難民等ハ善戦ヨク敵兵ヲ撃退シコノ要塞ヲ基礎トシテ町割ヲナシ葡萄牙定期船入津ノ港ト定ムルヲ得タリ是レ正ニ元亀二年ノ事ニ属ス長崎ハ忽チ勃興シテ日本ノ大湊トナリ鎖国時代ニ於テハ日本唯一ノ貿易港トシテ将又海外文化東漸ノ門戸ト

シテ近世日本文化ノ発達ニ偉大ナル貢献ヲナセリ[106]

松田は、記念日選定のために意見を求めた 4 氏の説それぞれを尊重するかたちで長崎の成立を説明し、元亀 2 年を長崎開港の年と述べ、その後の長崎が「海外文化東漸ノ門戸」として日本文化に偉大な貢献をしてきたとたたえながら、4 月 27 日がなぜ開港記念日なのかを語ることはないまま、長崎開港の記念式典や祝賀会、関連イベントを実施したのである。

6　戦時下の開港記念イベント

1930 年の第 1 回開港記念式は、開港年とされた元亀 2（1571）年から数えで開港 360 年とされたようだが、1931（昭和 6）年の第 2 回開港記念式は、開港から満 360 年とされ、このときも開港 360 年として開催された[107]。その式辞では、やはり 4 月 27 日について触れることなく、「海外文化東漸の門戸として新日本勃興に偉大なる貢献をなせる」（長崎日日新聞「光輝ある歴史の港長崎　三百六十年を回想して記念式と祝賀の宴」1931 年 4 月 28 日）と、長崎の歴史がたたえられ、記念式典・祝賀会、記念講演会とともに、開港記念春の市や市民大運動会などの催しが、開港記念日を中心として前後 8 日間にわたって開催される大規模なイベントとなった[108]。なかでも、春の市（商店街の連合市）は、宮日振興会と諏訪の市協会による「秋の諏訪市に対立せしめ」るものとして開催された[109]。

ただし、1932（昭和 7）年の開港記念日は、記念式と祝賀会、長崎史談会と協同した講演会のみの開催で、1933（昭和 8）年も長崎史談会と協同した講演会を 4 月 13 日に繰り上げて開催するのみだった[110]。1934（昭和 9）年は、長崎市主催の国際産業観光博覧会が長崎商工会議所も協賛会を組織し全面的に協力し、3 月 25 日から 5 月 23 日まで開催されたため、開港記念日とその翌日は、協賛会の企画部の計画のもと、先賢慰霊祭、ラジオ記念講演放送（武藤長蔵）、開港記念祝賀長崎市内小学校児童旗行列などの開催にとどまった[111]。

そのため、「長崎年中行事の主要なものにしなければならぬとの有力な論も出」るようになり、1935（昭和 10）年は、「長崎開港記念祭が年々萎縮してゆくのは誠に遺憾に存じますので本年は市と会議所で協議して最も有意義に開催したい」（1935 年 3 月 5 日、鈴木開港記念会専務理事の協議会あいさつ）と提起された[112]。そこで 1935 年は開港 365 年記念として、記念式典・祝賀会のほか大仮装行列や海上提灯行列などの催しとともに、各商店街の開港記念売り出しや活動写真常設館での入場料半額割引なども実施された。開港記念日当日の長崎日日新聞は、「秋の諏訪大祭にも比肩すべき春の大祭　長崎に新名物を更らに加ふる」という見出しで、開港記念会が「25 万余市民を挙げて寿ほぐ一大祝祭とすべく奔走」した結果、「秋の諏訪大祭にも比肩すべき春の祭絢爛の大絵巻は展開される」（1935 年 4 月 27 日）と報じている。

それとともに、このときの長崎新聞は、「国家が、これを公認し開港として今まで引続いてゐるのは長崎が最初のものである。此意味に於て長崎の開港即ち日本の開港といはれ廿七日の開港記念日が殊に意義ある所以」（「長崎みなと祭」1935 年 4 月 27 日）と報じている。さらに翌 1936（昭和 11）年の開港記念の取り組みをまとめた『長崎開港記念会記録　開港三百六十六年第七回』では、「開港記念祭の意義」として、「長崎開港以前にも貿易は本邦の各沿岸で一時的に又は多少継続的に行はれた事実はあるが、公認された開港として今日迄三百六十余年間も引続いてゐるのは長崎港の外は一つもない。この意味に於て長崎の開港は即ち日本の開港であり、長崎開港記念日は即ち日本の開港記念日とも謂ひ得る」[113]と述べられ、長崎開港記念会が発行した「開港記念祭の栞」でも同様のことが述べられている。こうして長崎の開港は、日本の開港とまで位置づけられていった[114]。それと

ともに、この開港記念日を中心とする一連の催しは、長崎開港記念祭あるいは長崎港祭りと呼ばれるようになったが[115]、1938（昭和 13）年と 1939（昭和 14）年は、日中戦争のために中止された。

1940（昭和 15）年は、紀元 2600 年と長崎開港 370 年にあたるとして、展覧会や児童対象のお伽大会、講演会などが開催された。お伽大会は、宮城遥拝し皇室の繁栄、皇軍将士の武運長久を祈って始められ（長崎日日新聞「長崎のみなと祭」1940 年 4 月 27 日）、長崎商工会議所の副会頭が開会のあいさつで、「今日では五十に近い開港があります。それで昔のやうに、外国貿易港としては長崎は重要なる港とは言へなくなりました。然し支那事変後の大陸に於て、東亜諸国を指導するといふ大きな仕事をして行かなければならぬ、日本としては、長崎は大陸と海一つの処で之から長崎の役目も非常に重要となり、従つて私達長崎市民の責任も重大となつて来ます。それで之から大きくなられ長崎を背負つてゆかれる皆さんも懸命に勉強し、努力し長崎の為めに、日本の為めに良い市民となられ、模範国民となつて頂かねばなりません」と子供たちに語りかけた。

また、講演会では、長崎税館長が、「長崎は後背地が狭い。工業地もない。まことに遺憾な次第ですが、然し、最近長崎の地位が中支に近く、興亜の基地、足溜りとなつて、地の利を得ることになつた。そこで人の和です。長崎人は一体に呑気過ぎる。協力一致の努力が足らない。[…]そこで明治開港五港の一であつた長崎が、更に港としてその使命を十分達するやう切望する次第です」と訴えた。

さらに、佐世保鎮守府の海軍中佐による記念講演会「海軍と長崎港」も開催され、中国での戦況などが説明されとともに[116]、長崎図書館と浜屋デパートでは、皇紀 2600 年、開港 370 年、新国民政府成立（注：汪兆銘による南京国民政府）を記念した展覧会が実施された（長崎日日新聞「長崎のみなと祭」1940 年 4 月 27 日）。その一方、商業的なイベントは開催されず、この年の開港記念祭は、日中戦争下で地域振興のイベントというよりも、長崎市民に戦争への協力や覚悟を強調するイベントとなった。そして、翌 1941（昭和 16）年に先賢慰霊祭が実施されたのを最後に、開港記念のイベントは実施されなくなった。

すでにこの時期の長崎港では三菱長崎造船所が海軍の艦艇を建造し続け、市街地では三菱の兵器製作所や製鉄所などが魚雷をはじめとする軍需物資の生産を拡大し、長崎は軍需産業都市化しており、記念祭開催の中心となっていた商工会議所も、長崎県商工経済会の発足（1943 年）とともに、これに統合され、国策への協力機関となっていった。同年に刊行された『長崎商工会議所五十年史』では、当時の長崎について、「支那事変は大東亜戦争にまで発展し、大陸前線基地としては勿論、我が南洋基地としての長崎が極めて重要視せられる」[117]と記しており、長崎の経済界は、日本が進めていた「新東亜建設」の拠点となることに期待を寄せていた。

そのようななかで、長崎史談会の機関誌『長崎談叢』の第 31 輯（1942 年）には、江口礼四郎の「菅沼貞風」が掲載され、第 32 輯（1943 年）は「南進先賢顕彰号」として、明治期にタイへの殖民事業を企てた石橋禹三郎や、17 世紀前半のオランダが占領していた台湾に渡り、紛争事件を引き起こした浜田弥兵衛など、長崎出身の人物を取り上げた。そのなかで、「長崎健と海上発展」という論考では、「今、この時局下、我等の郷土が如何程までに、海外発展基地としての役割を勤めたかを回想するのは、県人、明日の発展への清涼剤となりうると信ずるのである」として、長崎県とその海域を拠点あるいは経由地とした海外発展の概略や、それに関係するであろう長崎県各地の神社に祀られた神々を紹介し、海上発展から見た本県最大の誇りは、長崎こそ無敵海軍発祥の地であると述べ、それを誇りうる努力を続けることが訴えられた[118]。

7　戦後の開港記念イベント

戦争で中断していた開港記念の式典や催しは、1950（昭和 25）年に再開された。その当日、長崎日日新聞は、「泰西文化発祥地として偉大な役割をはたして来た長崎港を再び昔の長崎にかえして貿易発展の一助にもしようと」、復活第 1 回の港祭りが挙行されると報じたが（「泰西文化甦る〝鶴の港〟きようから盛沢山の港祭り」1950 年 4 月 27 日）、第 1 日目の様子は、「港こそ長崎の運命だというので復活された港祭りは在港船が少なく［…］長崎港は余りにも淋しかった」（お船はションボリ　陸に上つた長崎港祭り）1950 年 4 月 28 日）という。

1952（昭和 27）年の開港記念日は、サンフランシスコ平和条約の発効の日にあたり、長崎日日新聞の報道では、「永かつた七年間の占領生活にピリオドを打つた日―原子野にめざましい復興の槌音をひゞかせる長崎市は開港三百八十二年のみなと祭りと相まって街も人も感慨一しお」（「港長崎は歓喜の一色」1952 年 4 月 28 日）と、港祭りは日本の独立回復と長崎の復興と重ね合わされた。港祭りは、日本の敗戦と原爆被災を経て、昔の長崎港の繁栄を取り戻したいという期待と復興への願いのなかで、再開されたのである。

その後、1970（昭和 45）年には、長崎開港 400 年を迎えるとして、長崎県、長崎市、長崎商工会議所が中心となって「長崎開港 400 年記念行事」を開催した。この時、長崎市企画部長であった丹羽漢吉は、『長崎文化』27 号（開港 400 年記念号、長崎国際文化協会発行）に寄稿した「開港四百年の過去現在、そして明るい未来へ―長崎広域産業都市のビジョン―」のなかで、1970 年を開港 400 年としたことについて議論があったことを述べている。それによれば、ポルトガル人が大村純忠に長崎開港を申し入れた元亀元年と、町づくりをしてポルトガル船との貿易をはじめた元亀 2 年のどちらを開港の年とするかは昭和の初めに議論となり、現在まで結論が出ずにいるが、「元亀元年から数えれば本年は『満』四百年。元亀二年から数えれば四百年『目』となり、どっちをとっても長崎開港四百年には間違いない」[119]とする立場をとったという。

この問題については、1971（昭和 46）年の『長崎談叢』（第 50 輯）でも、長崎開港四百年記念実行委員会が、長崎開港 400 年記念とすることについて、「何から数えて四百年なのか、何故四月下旬なのか、という疑問が、多くの人に絶えずつきまとった」と述べている。そこで、開港は元亀元年か 2 年か、昭和 10 年以来の開港の数え方を踏襲してよいのかという問題点を指摘したうえで、開港 400 年を記念するにあたっては、正式な諮問という形はとらず、郷土史家らに意見を非公式に尋ねるという程度にとどめ、元亀元年か 2 年かは、実行委員会としては深入りしない方針で臨んだと記している[120]。そうしたうえで、実行委員会による「長崎開港 400 年記念行事・事業趣意」は、次のように訴えた。

> 自来、長崎は、海外文化流入の門戸となり、特に 200 年余にわたるわが国鎖国時代においては、国外に向かって開かれた唯一の窓として、極めて重要な地位を占めてきました。安政の開国、明治維新、そして日本の近代化という脱皮成長が、永い鎖国のあとであったにかかわらず、比較的短年月に円滑に推進されたのも、長崎に蓄積され或いは長崎を通過して、国内に拡散されていた先進諸国の思想文化があったからであります。この意味において、長崎開港の意義はただに、長崎だけのものではなく、近代国家日本への推進力を培養蓄積した基地の誕生と言うことができます。われわれ長崎市民は、そういう観点に立って長崎開港の意義を理解し、記念すべき年を迎えたのであります。従って、それにふさわしい各種の行事、事業等を行なうと共に、それを足がかりとし、又この年を契機として、将来への飛躍を期したいと思います[121]。

この趣意書では、長崎について、「海外文化東漸ノ門戸」とした戦前の長崎史を受け継ぎ、「海外文化流入の門戸」と位置づけ、「近代国家日本への推進力を培養蓄積した基地」と高く評価し、それにふさわしい行事や事業を実施することとともに、それを足がかりとした長崎の飛躍が期されている。この将来への期待は、『長崎文化』27 号に掲載された前述の丹羽の論考でも、「そのお祝いであるが、お祭り騒ぎの真似ごとをするのも、まずやむを得ないとして本当はこれを契機に将来への飛躍発展を心してこそ開港四百年を呼ぶ真の意義と価値があることは申すまでもないことであろう」と述べられている。そして、「斜陽化した長崎の将来は、矢張り港を抜きにしては考えられない」として、長崎広域産業都市建設の構想が語られている。

当時の長崎市は、戦前の中国、台湾、東南アジア、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアなどとの外国航路が復活することなく、中国との貿易も途絶したままで、造船業と水産業を基幹産業とする地方都市となっていた。ただし、当時進水量世界一を誇っていた三菱重工の長崎造船所と香焼造船所など、造船業が長崎経済を支えていたのに対して、水産業は近海漁業が振るわなくなり、衰退の兆しが見えており、また、交通事故の増加や公害の発生、住宅不足や制限給水が続く水道事情などの問題も抱えていた。

このようななかで開港 400 年記念祭は開催され、先賢慰霊祭・記念碑除幕式や 3,000 人以上が参加した祝賀大パレード、長崎港の見学会などの行事によって、長崎市民に日本のなかで「極めて重要な地位を占めてきた」長崎の歴史をアピールされた。それは、地方都市化し、さまざまな都市問題が発生するなかで、長崎の輝かしい過去をたたえ、長崎のローカル・アイデンティティを確認させ、新たな開発を進めていくバネとするための一大イベントであったといえる。

その後、1973（昭和 48）年には名称が「ながさきまつり」と変更され、県庁前（注：旧県庁）から市役所前までの大通りが歩行者天国となり、お祭り広場とされ、音楽隊や仮装カーニバルのパレードなどが実施された。これについて長崎新聞は、「伝統の港まつりを衣替え、市民総参加の春の行事にしようとの試み」で、「ゴールデンウイークをひかえて五、六万人を超す人手が予想される」と伝えている（「夜空に大輪の花　ながさきまつり開幕」1973（昭和 48）年 4 月 28 日）。さらに、この「ながさきまつり」は、1994（平成６）年から開催期間を夏休みに入った 7 月下旬に移され、当時開催されていた「ベイフェスタ・イン・ナガサキ」と「長崎ペーロン選手権」と合同した市民参加型の夏祭りとされた[122]。そして、名称は「ながさきみなとまつり」とされ、長崎商工会議所青年部と長崎青年会議所、長崎青年協会などの団体が中心となって開催されるようになった（「先賢顕彰式」は 4 月に実施）。

こうして、戦後復活した港祭りは、より多くの市民が参加することができる催しに改編されていき、開港記念日からも切り離され、名称も変更されていき、現在は長崎の夏祭りとして定着している。港祭りがもともと地域振興イベントとして、開港記念日も急きょ妥協的に決定して始まったものだったので、より多くの市民が集まるようにできるならば、開港記念のイベントである必要はなくなったのである。

その一方、現在は、2021 年に長崎開港 450 周年を迎えるとして、その記念事業を行うために、長崎県、長崎商工会議所、長崎市を発起人として、100 を超える団体が参画した長崎開港 450 周年記念事業実行委員会が設立されている（2019 年 8 月）。その設立趣意書は、次のように書かれている。

> 長崎港は、ポルトガル貿易船が入ってきた元亀 2 年（1571 年）に開港し、令和 3 年（2021 年）に開港 450 周年（開港記念日：4 月 27 日）を迎えます。長崎港は、鎖国時代から海外へ

の玄関口として海外の産業・文化の受け入れに重要な役割を果たしており、明治時代には上海航路などの連絡船が寄港する歴史ある貿易港として発展してきました。[…]長崎開港450周年を過去から未来に紡ぎ、次の50年に向けたスタートの機会として位置づけ、長崎のまちが港とそこから広がる海洋とともに発展していくことを県民、市民が認識し、行動を起こす契機とするため、記念事業を令和3年（2021年）に実施します。記念事業を通じて、長崎の港が育んできた歴史や文化の継承及びシビックプライドの醸成と、それらを活かした魅力の発信による交流人口の拡大を図るとともに、広い海洋利用の視点に立った新たな海洋関連産業の育成・創出に向けた契機とし、新しい港の活かし方や海の楽しみ方の創造につなげるため、各界の代表者の参画を得て官民一体となった長崎開港450周年記念事業実行委員会をここに設立いたします[123]。

この趣意書でも開港記念日の根拠には触れることなく、長崎を「文明東漸の門戸」とした長崎史を受け継ぎ、長崎港を、鎖国時代から「海外への玄関口として海外の産業・文化の受け入れに重要な役割を果た」すなど「歴史ある貿易港として発展」してきたと位置づけ、記念行事を県民・市民が行動をおこす契機とすると訴えている。

このように長崎の輝かしい歴史を強調し、県民・市民の行動を促しているのは、市町村別の統計で長崎市が、2018年と2019年に日本人の転出超過数全国最多となり、その克服が急務となっていることと無縁ではないだろう。「シビックプライド」をかきたて、地域を活性化しようとするとき、地方改良運動がそうであったように、郷土の輝かしい歴史が求められ、呼び起こされるのである。

8　おわりに

明治期に国民国家が形成されていくなかで、長崎の近代的な再編成を進めた政治指導者らは、同時に、ナショナルな枠組みのなかで長崎港を中心とした長崎史を創出していった。そして、明治末から昭和前半期を中心に、福田忠昭は長崎旧記を渉猟して長崎史研究をリードし、古賀十二郎と武藤長蔵は、外国の文献も利用した考証を積み重ね、永山時英は熱心に史料収集やキリシタン研究に取り組んだ。これらによる長崎史研究が、単なる郷土史研究を越えたレベルの研究となったことは疑いえない。

ただし、その研究は、地方改良運動で国民教化のために愛郷心や愛国心の高揚が求められるなかで、それに応えようとする側面をもっていた。明治末から昭和初期の長崎史研究は、お国自慢に陥ったというよりも、愛郷心高揚のためにお国自慢を創出する役割を担って活発化したともいえる。そのため、長崎は「文明東漸の門戸」として日本の歴史に重要な貢献をしてきたと位置づけられ、貿易や文化交流とともに、長崎を拠点に商権の拡大、海外雄飛、国威発揚に尽くしたとされた人物が偉人とされていった。そして、その長崎史が郷土誌や学校教育、史蹟、モニュメント、さらに開港記念祭という地域振興イベントなどによって広められていった。

そのなかで、長崎市や長崎商工会議所に配慮し、妥協的・折衷的なかたちで決められた長崎の開港記念日を、古賀らも容認し、「長崎の開港は日本の開港」とまで喧伝されるようになった。さらに、日本が戦争を中国から東南アジア・太平洋地域に拡大していくなかで、武藤が尽力し、南進論を説いた「新日本図南之夢」を掲載した『大日本商業史』が復刊されたり、長崎を拠点とした「南進」の歴史が長崎の誇るべき歴史として取り上げられ、開港記念祭も戦争への協力や覚悟を強調するイベントに変質していった。ただし、『大日本商業史』をきっかけに歴史研究を志した古賀が、後年、「商業学校の生徒だったので経済的面だけ見て侵略のことは考えてみなかった」（長崎民友新聞1953年

1 月 21 日）と語ったように、「南進」や海外雄飛の歴史が語られたとき、アジア諸地域は商圏や植民の対象に過ぎず、そこにアジアの人々への視点はなかった。

このように、日本の歴史への貢献を誇りながら、他者への視点を欠いた長崎史は、やはり「我田引水かつお国自慢的」な側面をもっていたと言わざるをえない。

日本の敗戦後は、長崎が「南進」の拠点であったと語られることはなくなり、開港記念日のイベントも市民参加型の祭りに改編され、記念日から切り離されて実施されるようになった。ただし、長崎の地方都市化と都市問題のなかで開催された開港 400 年記念行事（1970 年）や、日本人の転出超過数が全国市町村のなかで最多となっているなかで企画された開港 450 年記念事業（2021 年）では、地域の開発や活性化の契機とするために、長崎が「文明東漸の門戸」として偉大な貢献をしたとする長崎史を呼び起こし、「シビックプライド」をかき立てようとしている。

一方、1990 年代以降の長崎についての歴史研究のなかでは、安野眞幸が、ネットワーク論やカール・ポランニーの「貿易港」論、網野善彦の「無縁」論などをもとに、「貿易港」＝「港市」がネットワークの末端であり、異域世界との接点となる「無縁の場」＝聖地に成立した、「周辺的」かつ「二重所属的」な存在であると述べ、従来とは異なる視点から長崎の開港について考察している。それによれば、都市長崎は、キリシタン大名の大村・有馬・大友氏と肥前国の支配をねらう龍造寺・諫早の西郷氏・長崎湾口の深堀氏の対抗勢力の均衡する地点で、無縁の場・聖地・中立地点に、イエズス会と大村・有馬の 3 者によって人工的に建設された「港市」であるとされる。そのため、ポルトガル商人と日本商人とを接触させないために、町割の当初からポルトガル人向け船宿の町として「石垣」や「堀」によって囲まれた「内町」と、その外側に日本人商人向け船宿の町として「外町」の 2 つがあったが、大友氏の没落と竜造寺氏の勃興という変化のなかで、「内町」自身が自衛武装化して「自治都市」へ、さらには「港市国家」「教会領長崎」へと発展していったとされる[124]。

また、この石垣と堀で囲まれた「内町」（長崎開港記念日選定の協議会で古賀が主張した岬の要塞）については、高橋裕史がイエズス会の記録から、その後大規模に軍事要塞化していったことを明らかにしている。その著書『イエズス会の世界戦略』によれば、日本国内の戦乱のなかで、日本イエズス会は、キリスト教徒領主を保護者とすることを期待したが、大村氏や有馬氏らのキリスト教領主がむしろ日本イエズス会からの軍事援助を必要とし、その出費が日本イエズス会の財政を圧迫するなかで、教団の安全を図るために、港湾としての機能に恵まれ、塁壁や木柵を設け、長崎港の一部を切り開くなどして防衛体制を整えていた長崎の軍事要塞化と住民の武装化を進めたという。

このように、歴史研究における、国家の枠組みを超えたネットワーク論や網野善彦の「無縁」論などから長崎を位置づけた研究や、イエズス会文書を駆使した研究によって、長崎がさまざまなネットワークの中で開港場として形成され、イエズス会のもとで軍事要塞化していった経緯が明らかにされている。長崎の開港記念日について、妥協的に決定せざるをえなかったのも、長崎がネットワークの接点であり、日本内外の諸勢力が交差する周辺的な地であったため、長崎の「開港」を明確に定義づけることが困難で、様々な立場から議論となったためである。

そして、近世以降の長崎も、多様なネットワークの接点となったことで、鎖国期は特権的な貿易港として繁栄し、幕末期以降は石炭供給地・修理地として欧米列強や日本の艦船の航行を支え、戦時期には長崎港を中心に軍需都市となり、さらに大陸前線基地、南洋基地としての発展を目指した。このような長崎港の歴史からは、長崎が「文明東漸の門戸」となった歴史とともに、日本の帝国主

義的拡大の一端を担った過去が浮かび上がってくる。

過去は常に、政治的な利害や経済的な利害のなかで呼び起こされ、利用されるが、単に長崎を「文明東漸の門戸」とする歴史からシビックプライドを醸成しようとしても、それだけはお国自慢の愛郷心に陥ってしまうだろう。ナショナルな枠組みをこえた多様で重層的な歴史のなかからこそ、豊かな未来の可能性を展望できるだろう。

9　注

[1] 西垣晴次「自治体史編纂の現状と問題点」朝尾直弘ほか編『岩波講座日本通史別巻 2 地域史研究の現状と課題』岩波書店、1994 年、46 頁。

[2] 木村礎「郷土史・地方史・地域史研究の歴史と課題」、同上書、15～20 頁。

[3] 越中哲也「「長崎学」とは何か」『長崎文化』第 68 号、長崎国際文化協会、2010 年、73～74 頁。

[4] https://www.city.nagasaki.lg.jp/soshiki/129/190300250/index.html（2020 年 3 月 8 日）

[5] 永島正一「長崎学を確立した古賀十二郎」長崎県教育委員会編『郷土の先覚者たち―長崎県人物伝』1968 年、262～264 頁。なお、越中哲也は、このタイトルから、戦後、「長崎学」という言葉を意識的に強調された人は、永島正一先生ではなかったかと考えていると述べている（越中哲也『長崎学の人々』長崎純心大学博物館、2005 年、3～4 頁）。ただし、広島大学の浦廉一（平戸出身）は、1953 年 5 月 2 日の長崎日日新聞に「長崎学の振興」という論考を寄稿しており、そのなかで、日本近世史並びに近世から現代の移行に於ては長崎を知ることなくしては全然了解することはできない、また、長崎を知ることなくして世界近世史を究明することは不可能として、「この意味において長崎は科学的研究の立派な対象となり得るものでここに『長崎学』（Nagasakiology）の成立を見るのである」と記し、長崎研究所の設立など「長崎学」の振興を訴えている。そして、浦の教えを受けた中村質は、大正、昭和期の「長崎学」を南蛮紅毛的な、やや趣味的な感じを拭いきれないと述べ、この流れとは別に、もう一つのアカデミックな、地味なものとして、中国や朝鮮半島、アジア各地との関係を研究した矢野仁一や浦らの研究があり、浦から「ナガサキオロギー」なるものを伺ったと述べている（中村質「日中貿易と長崎」長崎県教育委員会編・発行『長崎学県民講座―長崎と海外文化との出会い―』1987 年、89～90 頁）。それとともに、浦は古賀について、高邁な史見と豊かな語学力を以て立派な業績を出し出されつつあると記し、中村は浦に連れられて古賀のお見舞いに伺ったことを述べているので、このような交流のなかで、1950 年代から長崎学は構想され始めていたと思われる。

[6] 外山幹夫『長崎 歴史の旅』朝日新聞社、1990 年、206～207 頁。

[7] 西垣、前掲論文、46～47 頁。

[8] 高木博志「史蹟・名勝の成立」『日本史研究』第 351 号、1991 年など。

[9] 古賀については、越中哲也「長崎学の創立者　古賀十二郎小伝（1～3）」『長崎談叢』（81～83 輯、1994～1995 年）や中嶋幹起『古賀十二郎　長崎学の確立にささげた生涯』（長崎文献社、2007 年）によって、その生涯が詳細に明らかにされている。中嶋による伝記は、古賀が長崎で創刊し雑誌の論考を紹介するなど、著名になる以前の古賀について知ることができる労作である。本稿は、特に中嶋の著作に大きな示唆を受けている。また、武藤については、その遺稿集『海外文化と長崎』（武藤長蔵先生遺稿刊行会、1977 年）のなかで、武藤の教え子らがその思い出を語っている。近年では、谷澤毅が『長崎偉人伝 武藤長蔵』（長崎文献社、2020 年）を著したことで、武藤の活動の足跡をたどることができるようになった。

[10] 「長崎学」についての研究としては、鋤田慶・葉柳和則「「長崎学」における知の編成と「伝統の創出」―客観的指標に基づく外在的分析の試み」『長崎大学総合環境研究』（第 12 巻第 2 号、2010 年）が、「長崎学」が取り上げてきたテーマの変遷を分析し、その背景として知識人の共同体（1950 年代）や行政（1990 年代）の参加を指摘したうえで、行政による「長崎学」の継承が、地域のアイデンティティ形成を促す「伝統の創造」のための事業となったと指摘している。ただし、その分析は 1940 年代以前と 1950 年代以降の 10 年間ごとの比較であり、戦後期の分析が中心で、1940 年代以前については詳細に考察されていない。本稿は、この 1940 年代以前を中心として、その時期に現在の「長崎学」の基礎となる「長崎史」がどのように創出され、確立されてきたのかを考察するものである。それは、鋤田・葉柳論文が指摘している「長崎学」の地域のアイデンティティ形成を促すための事業という側面を、その萌芽期にさかのぼって検証することにもなるだろう。

[11] 金井俊行『増補長崎略史』長崎市役所、1926 年、1~2 頁。なお、本稿で引用している史料の旧漢字は新漢字に改めている。

[12] 井口丑二『長崎小史』鶴野書店、1893 年、序 1～3 頁。
[13] 同上書、本文 2 頁。
[14] 福地源一郎『長崎三百年間 ： 外交変遷事情』博文館、1902 年、叙自 2～3 頁。
[15] 荒木周道『幕府時代の長崎』長崎市役所、1903 年、叙言 1～2 頁。荒木は市参事会員で、1901（明治 34）年の市会での市長選挙では横山が第 1 候補者に当選した時、第 3 候補者に当選している。
[16] 同上書、幕府時代之長崎序 5~6 頁。
[17] 古田和子は、『上海ネットワークと近代東アジア』（東京大学出版会、2000 年）のなかで、上海を中心とする定期航路網が整備されたことによって、上海を中心とする東アジアの流通ネットワークが形成されたと指摘し、それを上海ネットワークと呼んでいる。
[18] 成田龍一は、1880 年代後半から 90 年代に、考証史学と民間史学という 2 つの歴史へのアプローチが、「国民」の過去を臣民的時間と国民的時間を重ねあわせて描き出し、互いを補完しあい、共犯関係を作り出すことによって、近代の、国民＝国家の歴史的時間が誕生したと指摘している（成田龍一「時間の近代―国民＝国家の時間」（小森陽一ほか編『岩波講座近代日本の文化史第 3 巻近代知の成立』岩波書店、2002 年）19 頁）。また、キャロル・グラックは、日本、フランス、ドイツ、イギリス、アメリカでは国民－国家化のプロセスが同時期で進行しているが、そのひとつのピークとなっている 1880 年から 1890 年に、それらの国々で国史という分野の成立と職業化が起こったと述べている（キャロル・グラック「近代の文法」『思想』1994 年 11 月号、3 頁）。
[19] 荒木、前掲書、2 頁。
[20] 同上書、叙言 2 頁。
[21] 井口、前掲書、1～3 頁。
[22] 金井俊行『長崎年表』以文会社、1888 年、7～8 頁。
[23] 神功皇后の伝説をはじめとする長崎周辺の地名譚や伝説について、安野眞幸は、家船の人々（水上生活者）が陸地に上がってくるなかで持ち込んだと推論している（安野眞幸『世界史の中の長崎開港』言視舎、2011 年、159～167 頁）。
[24] 長崎市小学校職員会編・発行『郷土先賢列伝』1916 年、例言。
[25] 文部大臣の小松原英太郎は、内閣に提出した教育上実行すべき計画のなかで、まず、「師範教育を改良し、生徒をして十分に国民道徳の根本観念を習得せしめ実践躬行、身を以て児童を薫育し忠良なる国民を育成するに足るべき良教員を出す」ことや、小学校教員について、「国民教育に従事する者は国家に対し重要なる責任を有する者なりとの観念を深からしめ且安んじて其職務に従事するを得しむべし」と、小学校教員の役割を重視した。さらに、社会教育（通俗教育）を「健全なる国民的精神を涵養する」ための最有力の手段として奨励し、その興隆を図ることなどを示した（有松英義編『小松原英太郎君事略』1924 年、111~114 頁）。
[26] 住友陽文「史蹟顕彰運動に関する一考察」『日本史研究』351 号、1991 年、97 頁。
[27] 内務省編『地方改良事業講演集上』内務省地方局、1909 年、72～75 頁。
[28] 高木博志「史蹟・名勝の成立」『日本史研究』351 号、1991 年、73～75 頁。
[29] 「愛郷心の保護」『斯民』11 編第 9 号、1916 年、17 頁。
[30] 長崎市小学校職員会編『長崎市郷土誌』1918 年、緒言。
[31]玉園散人（古賀十二郎）「幕府時代の長崎の増補に就いて」（『長崎評論』第 1 号、1912 年）には、「当市小島尋常小学校長福田忠昭氏」とある。
[32] 福田忠昭『振遠隊』1918 年、「本書編纂経緯」1 頁。
[33] この論評は、長崎歴史文化博物館所蔵『鶴城亭集 大正 5 孟夏 福田忠昭掲載記事雑誌合綴』に綴じこまれている。
[34] 荒木周道原著、福田忠昭増補訂正『増補訂正 幕府時代の長崎』長崎市役所、1913 年、北川信従「増補訂正序」8～9 頁。
[35] 長崎古蹟保存会創立発企人編『長崎古蹟保存会趣意書、長崎古蹟保存会規約 明治 45 年 4 月』1912 年、長崎歴史文化博物館所蔵。
[36] 1912（明治 45）年 2 月 6 日の東洋日の出新聞に、「長崎古蹟保存会創立の趣意」が掲載されたが、古賀十二郎は、「古色の保存　長崎古蹟保存会創立に望む」という論考のなかで、「之を有志間に配布し各自の意見を忌憚なく吐露せんことを懇望された、而後すでに朞月にもなるのである、而も、余の寡聞なる、未だ曽て誰一人として、かねて抱懐せる高説を披瀝した者があると云ふ事を耳にしない」）と、同会の創設にあたって積極的な議論が交わされることがなかったことを述べている（『長崎評論』第 4 号、1913 年）。同会設立後も、新聞報道では、長崎市内とその近郊にある古蹟 30 余ヵ所に標識を建て（「古蹟保存標識」長崎日日新聞』1914 年 4 月 24 日）、長崎市有地売却委員会に旧鐘楼の保存を要望し（「古蹟保存会の要望」長崎日日新聞』1914 年 7 月 6 日）、「高島秋帆五十年祭」を開催する（『東洋日の出新聞』「秋帆先生五十年祭」1915 年 2 月 26 日）などの活動を行っているが、規約に定められた他の活動について取り組んだ記

録はほとんど確認できない。
[37] 福田忠昭「光栄の記」『長崎県教育界雑誌』256号、33～34頁。
[38] 菅沼貞風『大日本商業史』東邦協会、1892年、633頁。
[39] 同上書、「大日本商業史附録菅沼貞風君手束」5～6頁。
[40] 中嶋幹起は、『長崎評論』の発行について、古賀の東京外国語学校の先輩である安藤県知事の在職時に、県立長崎図書館設立の予算案が県議会で議決され、その設立の年に『長崎評論』の発行がかさなり、安藤県知事の離任と同時に停刊となっていることから、おそらく図書館新設にもりこまれた予算の一部で出版されたと推測している（中嶋幹起『古賀十二郎:長崎学の確立にささげた生涯』長崎文献社, 2007年、100頁）。さらに、中嶋は、県立長崎図書館の設立には、この古賀と安藤の関係から、県政での知事の力を頼んだ図書館設置に向けての古賀のはたらきかけがあったとしている（同書、93頁）。この古賀と図書館との関係については、古賀の死後開かれた「古賀翁をしのぶ座談会」のなかで、県立長崎図書館司書の田中享一が、「図書館を創設したのは古賀先生の努力でまた初代館長に永山氏を推薦したのも古賀先生であつた」と語り、同図書館長の森永種夫も「生前、図書館で二回会つたが、自分が図書館を作つたのだと自慢話のように話していた」と述べている（「古賀十二郎翁を偲ぶ」1954年9月12日）。ただし、これらを裏付ける記録は今のところ確認できていない。
[41] 古賀十二郎「幕府時代の長崎の増補に就いて」『長崎評論』創刊号、1912年、5頁。
[42] 福田忠昭「支那人の偉業」『長崎評論』創刊号、12頁。
[43] 荒木原著、福田増補訂正、前掲書、1~3頁。さらに、「学術技芸」の項の増補分の説明のなかでも、「泰西文明ノ東漸ハ長崎歴史ニ於テ最重要ノ部分タラザル可ラカズ、而カモ従来ノ長崎史中系統的ニ叙述セルモノニアラズ、本書ニハ其ノ梗概ヲ記述シ以テ近代文明ニ対スル長崎市ノ位置ヲ闡明セントヲ務メタリ」（同書、4頁）と解説している。
[44] 同上書、4頁。
[45] それとともに、中嶋幹起は、それまでの歴史学が見のがしてきた女性や心性を研究対象とし、現代では「社会史」とよばれる業域の研究に取り組んだとして、古賀を長崎『アナール』学派と呼ぶなど、高く評価している。
[46] 古賀十二郎「古色の保存（二）長崎古蹟保存会創立者に望む」『長崎評論』第4号、1913年、4頁。
[47] 中嶋、前掲書、110頁。
[48] 東洋日の出新聞は五十年祭の開催前に「長崎史談会及びと古蹟保存会発起の下」と報じており（「秋帆先生五十年祭」2月26日）、開催後は両団体の「主催」と報じている（「秋帆五十年祭」1915年3月2日）
[49] 福田の『振遠隊』（1918年）に古賀が寄せた序には、「畏友福田忠昭君夙に長崎史の研究に従事し、覃思精究こゝに十余霜、微を闡き隠を表し、大に斯道に寄与貢献せられしこと普く崎人の識る所なり」、「君は特に同志の一人として余に嘱するに序文を以てす、余短才膚学を顧ず、喜んで需めに応じ聊か所見を述ぶ」と、福田への長崎史研究の「同志」としての変わらぬ敬意と信頼が綴られている。そして、長崎市長を会長とし、史跡の顕在化・保存などのために設立された古蹟保存会と、長崎県の内務部長を会長として、史料調査などに取り組んでいた長崎史談会も、相互に補完する関係にあったとも考えられる。
[50] 東條文規によれば、当時の小松原英太郎文部大臣は、「大逆事件」後に、「社会教育（或は通俗教育）を盛にし社会の風紀を廓清し努めて醇良なる国民的精神を涵養するは亦一般青年に対する不健全なる誘惑感染を防ぐ最有力の手段なり」と提起するなど、社会教育を、何よりも小学校卒業のまま直ちに社会に出る大多数の国民を「健全」な思想に導く手段と認識しており（東條文規『図書館の政治学』青弓社、2006年、95～98頁）、そのもとで文部省は、図書館に要請されるのは「健全」なる蔵書の充実と考え、そのために「標準目録」の作成や社会教育主事らの配置を行い、図書館を「思想善導の機関」として「充実」させることに力を注いだとされる（同書、103頁）。
[51] 文部大臣官房文書課編『日本帝国文部省年報』第36(自明治41年至明治42年、中屋商店、1910年、321頁。
[52] 文部大臣官房文書編・発行『日本帝国文部省年報』第48、1923年、328頁。
[53] 福田は、「長崎市史編纂の儀」（一）でも、「長崎に図書館の設なし」と、図書館の設立を訴えていた（東洋日の出新聞1911年12月3日）。
[54] 長崎県立長崎図書館編・発行『県立長崎図書館50年史』1963年、2～4頁。また、東條文規によれば、大正大礼記念で新築・改築された県立図書館は7県で、うち3県が九州であり、当時九州では図書館の設立熱が高まっていたという。さらに、当時、内務省の任命制であった知事の権限は、現在と比べられないほど大きく、図書館政策も知事の個人的な資質に左右される部分もあり、長崎県

立図書館の新設を決定した李家知事は、前任の石川県でも県立図書館の新設を推進し、初代館長には後に台湾総督府の 2 代目図書館長に転任するなど、図書館経営に関して見識をもった運営をおこなっていた並河直広を任命し、石川県と長崎県の図書館経営の土台を築いたという（東條、前掲書、68～74 頁）。

55 永島正一『長崎ものしり手帳』長崎放送、1972 年、89～90 頁

56 東洋日の出新聞「市史編纂儀進捗」（1919 年 4 月 5 日）は、「高崎市長は[…]永山氏監修たるを承認すると共に知事も其就任に同意」と報じている。長崎市史の編纂の経緯については、藤本健太郎「『長崎市史』編纂事業と古賀十二郎」（長崎市長崎学研究所紀要『長崎学』創刊号、2017 年）で詳細に明らかにされている。

57 東洋日の出新聞によれば、事務所を県立長崎図書館内に置き、「長崎に関係のある歴史及び地理を研究し且つ関係史料並びに名所旧蹟等の保行発揚を講ずる」ことになった（1919 年 7 月 15 日「長崎史会組織」）。

58 長崎県史蹟名勝天然記念物調査委員会『史蹟名勝天然記念物報告第一号』（長崎県、1922 年）の巻末に「長崎県史蹟名勝天然記念物調査委員会規程」、「長崎県史蹟名勝天然記念物調査委員会職員」が掲載されている。

59 昭和天皇の御大典に際して、長崎県で 2 名が社会事業功労者として表彰されたが、永山はその 1 人に選ばれている。これを報じた長崎日日新聞は、「本県教育界及幾多の社会事業に貢献した人」と報じている（「社会事業功労者　本県で二人表彰さる」（1928 年 11 月 12 日）。

60 「時勢の変遷と国民教育制度の変更」『図書館雑誌』第 21 年第 1 号（第 86 号）1927 年、5～9 頁。

61 永山は長崎日日新聞に寄稿した「現代図書館の意義」（昭和 3 年 10 月 29 日）のなかでも、「思想の善導」として、同様の主張を展開している。

62 永山時英「報徳会創立当時の思ひ出」『私の眼に映じたる花田先生』東亜報徳会総務所、1940 年、7～9 頁。この報徳会は、井竿富雄によれば、教育勅語の精神を日本社会に根付かせようとする試みの一つとされ、天皇中心の国家体制になじむ臣民の創造を担っていたと評価されている（井竿富雄「花田仲之助の報徳会運動―山口県を中心に―」『山口県立大学学術』第 6 号, 19-28, 2013 年）

63 機関誌『報徳』に掲載された永山による講演記録「現代思潮の病根と吾人の覚悟」では、まず、明治維新後我国は、広く知識を求め、国運興隆の基礎が作られたが、フランス革命によって詭険性を帯びたヨーロッパの思想も輸入され、思想界が混乱するなか、教育勅語によって、国民は迷夢を醒まし、その向かう所を知ることができるようになったと主張している。そのうえで、その後、ヨーロッパで「詭激な思想」が勢力をえて、ロシア帝国やドイツ帝国、オーストリアなどが滅び、「詭激な思想」は日本にも伝わり、「我が国民道徳の如きも旧道徳として多く顧みられぬやうになり、国家の基礎に亀裂を生じはせぬかと按ぜられるやうになりました」と述べる。そして、その詭険思想の病根がユダヤ人が世界各国を亡ぼし、これを統一しようとする陰謀であるとして、シオニストの秘密会合でユダヤ・フリーメイソンの首領が演説したという「世界破壊の計画」を紹介し、「国民道徳の復興に志し億兆心を一にして我が大和民族の使命に向つて猛進せねばならぬと思ひます。而してそれが我が国民の本分であり、同時に各自の利益と幸福を保護増進する所以であると思ひます」と結んでいる（永山時英『思潮 ： 現代思潮の病根と吾人の覚悟』中町報徳会事務所、1925 年 :『報徳』からの転載）。これは、シベリア出兵を契機に日本国内に持ちこまれた反ユダヤ主義の影響と思われるが、本文で触れた永山の「時勢の変遷と国民教育制度の変更」（『図書館雑誌』第 21 年第 1 号）での、「種々の魔の手が四方から窺ひ寄つて国家を亡滅の淵に導かんと試みる」という主張の論拠としても、同様のことを述べており、さらに、長崎歴史文化博物館が所蔵する永山による「長与小学校に於ける講演」の原稿（1924 年 2 月 11 日）にも、同じ内容の記載がある。

64 ただし、山田によれば、そうして開拓した各分野の研究は未完のものが多く、どこに研究の本領があるのかとまどわせたという。また、長崎に関しても、ケンペル、ツンベルグ、シーボルトを見直し、「大日本商業史」の菅沼貞風をめぐって明治初期の商業経済の書誌を探求し、さらに、長崎の寺町や長崎県対外史料文献考などの力作を生み出し、正保・貞享の蔔船長崎入津の日本側史料とオランダ風説書の研究に及んだことなどを紹介しているが、その大成を見ないで終っていると評価している（「白百合の花」山田憲太郎編『海外文化と長崎』千倉書房、1977 年、2～3 頁）

65 武藤長蔵「恩師を偲ぶ」『如水会会報』200 号、1940 年、11 頁。

66 武藤長蔵「浜田耕作博士の追憶」京都帝国大学文学部考古学教室編・出版『浜田先生追悼録』1939 年、335～336 頁。

67 武藤、「恩師を偲ぶ」、11 頁。

68 夏目琢史「横井時冬論―商人・職人を中心とした、もうひとつの「国史」研究の可能性―」『一橋

大学附属図書館研究開発室年報』第 3 号、2015 年、26、30～31 頁。

[69] 山田憲太郎編、前掲書、3 頁。その具体的な例は谷澤毅が「カント著『人性論』とツンベルグ長崎出島滞在記」（商業と経済　第 8 巻第 2 号）という論文を例にあげて説明している（谷澤毅「シーボルト的、ゲーテ的、万有科学者的存在－長崎高商教授武藤長蔵の百学連環」『長崎県立大学論集』第 42 巻 4 号、2009 年）。

[70] 馬場誠「武藤さんの想出」『長崎談叢』第 32 輯、1943 年、84 頁。中嶋幹起によれば、武藤と古賀はともに家庭が商業を営み、裕福で商業学校に学んだこと、勉強がしたくて、専攻科にまで進む強い向学心をいだいている気質も同じで、外国語に通じている共通点があることから、古賀は武藤をこのましく、重宝な友人として交際していたという（中嶋幹起、前掲書、234 頁）。

[71] 渡辺庫輔の回想によれば、昭和の初めごろ、藤木博英社（印刷会社）のなかに、古賀十二労と渡辺のグループと、後に県立長崎図書館長となる増田廉吉と神代祇彦のグループがあり、後者の 2 人も古賀のところに出入りしていたので、これらを一つにしようというのが動機で、古賀は当時世間から遠ざかっていたが、大正ごろ古賀を盟主とした長崎史談会があったので、渡辺がその名称を復活するのがよいと発案し、新しい長崎史談会が生まれたという（渡辺庫輔「長崎史談会と長崎学会」長崎国際文化協会『長崎文化』1 号、1959 年、9 頁）。さらに渡辺は、「風中放談 5」（長崎民友新聞 1958 年 4 月 23 日）では、第 2 次史談会の発足時、永山時英の長崎史会、福田忠昭の史跡保存会というのもあったが、これらを第 2 次史談会に合併して、古賀、福田、永山、武藤らに顧問になってもらったと語っている。

[72] 山田憲太郎編『海外文化と長崎』序。

[73] 戦後、経専（現在の長崎大学経済学部）図書館で、武藤文庫の整理を担当した宮崎震作は、武藤とは会ったこともなかったが、長崎では「高商の名物」で、郷土の名士でもあり、その名前くらいは古くから聞き知っていたと回想している（宮崎震作「武藤長蔵教授を想う」『経営と経済』第 33 巻第 1 号、1953 年、134 頁）。ただし、福田、古賀、永山、武藤の 4 人が、最初から長崎史研究を担った中心人物と評価されていたわけではない。1954（昭和 29）年に古賀が死去した時、長崎日日新聞が座談会を開催し、「古賀十二郎を偲ぶ」という記事を掲載しているが（1954 年 9 月 12 日）、座談会に出席した古賀の弟子であった郷土史家の渡辺庫輔は、「長崎研究からいえば古賀先生と植物学者であつた福田氏の二人があげられる」と発言している。一方、武藤については、「中央の学者との接触がきらいであつたため、そうした人達との交際は武藤先生を通じて連絡をとつていた」と述べているだけで、永山についても、渡辺は、「来崎された閑院宮様の御前講演には最初古賀先生となつていたが途中で永山県立図書館長に変更されたので非常に残念がつていた」と語るだけである。さらに、渡辺は、長崎民友新聞連載の「風中放談」4（1958 年月 22 日）のなかで、「永山はキリシタン学者の如くいつていたが学者というほどではなかつた。武藤は日英交通史を研究して部分的には大した成果をあげているといつてよい。福田は古記録による人で、根本資料にはあまりふれてない。しかし、福田さんぐらいになるということがすでに大したことだと想う」と、福田を永山と武藤よりも高く評価している。それに対して、長崎図書館司書の田中亨一は、長崎民友新聞に連載された「書架の片すみ　県立図書館のうらばなし」の第 3 回（1957 年 10 月 28 日）は、「長崎の三羽がらす」という見出しで、武藤長蔵、古賀十二郎、永山時英の 3 人は長崎の郷土史研究家として、その名が高かったと紹介している。その後、渡辺庫輔が死去したときに、長崎新聞社が開いた「庫輔さん追悼のつどい」のとき、長崎新聞主筆の松浦直治は、「古賀十二郎、武藤長蔵、永山時英の三先輩が長崎学の基礎を固められたのですが、古賀先生方は、言わば信長の役をされ、これを継がれた渡邊さんは秀吉の役を果たされたと言えましょう」と述べている（長崎新聞、1963 年 6 月 28 日）。これらのことから、古賀、武藤、永山の 3 人が特別視され始めたのは、1950 年代後半から 60 年代前半頃と思われる。また、渡辺に高く評価されている福田は（植物学者としての側面があったのかは不明）、県立長崎図書館司書や長崎市立博物館学芸員などを勤めた島内八郎も、「長崎市史編集の事実上の中心人物で、大きな業績を残」すとともに、篤実無口型で、万事に「事挙げしない」人だったと評されている（「史談会昔話」『長崎談叢』第 50 輯、1971 年、53 頁）。この福田を入れて長崎の四羽烏と呼ばれることもあるが、福田を除いた 3 人については、「武藤、永山、古賀を長崎学の三羽烏と呼んだが、三人三様の変人揃い」（永島正一『長崎ものしり手帳』90 頁）、あるいは「長崎学の三奇人」（『「跋武藤先生のこと」海外文化と長崎』17 頁）とも述べられており、3 人の学問的な貢献とともに、その特徴的な個性から、特に三羽烏と呼ばれはじめた可能性もある。

[74] 江口礼四郎「『大日本商業史」と武藤先生』」北村徳太郎編『武藤先生還暦記念誌』佐世保文化連盟、1941 年、3～4 頁。

75 江口礼四郎『菅沼貞風伝 南進の先駆者』八雲書林、1942 年、303～304 頁、武藤による序。
76 山田憲太郎編、前掲書、4 頁。
77 福本日南は、菅沼と共にマニラに渡り、菅沼の最期を看取った人物で、『大日本商業史 附平戸貿易史』の巻頭の「菅沼貞風伝」を執筆した。
78 菅沼貞風『大日本商業史』岩波書店、1940 年、跋 39 頁。
79 「新日本図南之夢」菅沼貞風『大日本商業史』1940 年、657～659 頁。菅沼の構想は、「阿蘭陀の領する爪哇,「スマトラ」の諸島を取り，然して後暹羅を助けて英と一戦し,「マラツカ」半島を復して新嘉坡の峡門を扼し、然して後朝鮮を助けて露と一戦し、満洲の全域を復して浦潮斯徳、「ニコライスク」、樺太、東察加の嶮要を占め、然して後朝鮮、暹羅を約束して支那の頭尾を箝制し、苟も機会があらば台湾の一島を略取して彼が海上の威権を抑へ、勢禁形格して我に従はざる能はざらしめ、以て東洋の覇国たるは夫この策にあるのみ」というものであった。
80 菅沼貞風『大日本商業史』1940 年、跋 39 頁。
81赤沼三郎 『菅沼貞風』（博文館、1941 年）、花園兼定『南進論の先駆者菅沼貞風』（日本放送出版協会、1942 年）、河西新太郎『南へ飛ぶ歌　南進の先駆者菅沼貞風伝』（田中宋栄堂、1942 年）、江口礼四郎『菅沼貞風伝 南進の先駆者』（八雲書林、1942 年）など。
82 江口礼四郎『菅沼貞風伝 南進の先駆者』、311～312 頁。
83 江口礼四郎「『大日本商業史』と武藤先生」『武藤先生還暦記念誌』、3～4 頁。
84 長崎商工会議所編・発行『第一回長崎開港記念会記録』1930 年、1 頁。
85 4 名の主張は、『第一回長崎開港記念会記録』に掲載されている「長崎開港年月日に就ての意見書」よりまとめた。
86 長崎文庫刊行会が 1928 年に出版した『長崎志正編』（古賀十二郎校訂）からは、古賀が述べている付録の存在は確認できない。『開国文化』に収められている「海外交渉中心地としての日本」では、最近ルイス・フロイスの日本志稿本のドイツ語訳本が出版されたが、その本などに長崎勃興に関する究竟の記事が載せてあるとして、要塞や戦いについての記述が紹介されているので（大道弘雄編『開国文化』（大阪朝日新聞、1929 年）198～200 頁）、古賀はこのフロイスのドイツ語訳をもとに、深堀氏の古文書で裏付けながら自説を主張したと思われる。
87 協議会での議論は、『第一回長崎開港記念会記録』のなかの「記念日の決定するまで」から引用した。なお、長崎開港 400 年記念実行委員会「長崎開港 400 年とする諸問題」（『長崎談叢』第 50 輯、1971 年）のなかでも、同様の会議録が「開港記念日選定協議会要領筆記」として掲載されている。
88 長崎市役所編・発行『長崎と海外文化』1926 年、22～23 頁。なお、藤本健太郎「『長崎市史』編纂事業と古賀十二郎」（長崎市長崎学研究所紀要『長崎学』第 1 号、62 頁）によれば、『長崎市史』刊行計画が遅れるなかで、それまでも未刊行編をようやくする形で、『長崎と海外文化』の上編を永山、下編を古賀が担当し、刊行されたとされる。
89 浦川和三郎『切支丹の復活』後篇、日本カトリック刊行会、1928 年、946 頁。
90 仁尾環『長崎の史蹟と名勝―雲仙と其附近並に諫早地方』宮本書店、1932 年、142 頁。
91 川島は長崎市史の編修委員に任命され、貿易編を担当するなどしたが、1922 年に死去したため、その遺稿が川島の弟から永山に託され、『南国史話』というタイトルで出版された。その冒頭の序で永山は、史料蒐集の目的で川島が長崎図書館を訪れたとき、2 人の意気は相通じ、もとめるところも同じだったので、一見互いに旧知の如く、快談時の移るのを覚えなかったと回顧し、市史編纂や史蹟名勝天然記念物の調査でも共に委嘱され、研究の結果を交換するの便をえたのみでなく、史蹟を歴訪し、裨益する所多大なものがあったと記している（川島元次郎『南国史話』平凡社, 1926 年、3～5 頁）。なお、1919 年 2 月 28 日の東洋日の出新聞では、この年が長崎開港以来 350 年に相当するなどの説があったことから、永山が高崎市長から正確な調査を委嘱され、調査の結果、大正 10（1921）年が満 350 年になることが判明したと報じられており（「開港記念計画」）、これによれば、1919 年時点では永山は長崎の開港を 1571 年と判断していたことになる。
92 川島元次郎『長崎史蹟名勝案内』好文同書店、1921 年、166～167 頁。
93 長崎市役所編・発行『長崎市史風俗編』（1925 年）7 頁。
94 武藤長蔵「日支吉利支丹史料比較の必要性」『長崎談叢』第 1 輯、1928 年、98 頁。
95 長崎商工会議所編『第一回長崎開港記念会記録』、16 頁。
96 この 1930 年 4 月 3 日の『福岡日日新聞』の記事は、長崎歴史文化博物館が所蔵する植木家資料の新聞切抜「長崎開港記念日は四月廿七日と決定」より。
97 ただし、この記事は、武藤、古賀、永山、福田の考古学者の来席を求め協議会を開いたと報じ、

武藤と福田が欠席とは書いていない。また、この記事では長崎開港について、「本年が其の三百五十年に相当するので」とあるが、これは三百六十年の誤りであろう。

[98] 永山時英「長崎の開港と開港記念日に就いて」長崎開港記念会編『長崎開港記念講演集』長崎商工会議所、1931 年、59 頁。

[99] 1935 年 4 月 27 日付『長崎新聞』に掲載された「長崎みなと祭」と題した記事のなかで、「記念日制定の根拠」として、協議会のときの 4 名の説が紹介されており、そのなかの永山説の紹介の後に、括弧で括り、尚ほ永山氏は、その後同説を改良するところがあったとして、開港の年を天正 16 年と主張していた永山は、元亀 2 年開港説は従来『長崎志』その他の著書によって一般に承認されているところであったが、近頃発見された西洋側の史料もまた、これを証明しているとして、自説を改めたことが付記されている。

[100] 長崎商工会議所編『第一回長崎開港記念会記録』、21 頁。

[101] 同上書、39～41 頁。長崎商工会議所編・発行『長崎商工会議所五十年史』1943 年、1008～1009 頁。

[102] 長崎商工会議所編『第一回長崎開港記念会記録』、1 頁、42～43 頁。

[103] 長崎開港四百年記念実行委員会「長崎開港四百年とする諸問題」(『長崎談叢』第 50 輯)でも、盛沢山の行事が催されているので、準備は早くから進められていたのであろうと推測されている（63 頁)。長崎の開港を記念しようとする最初の動きは、1909 年に、熊本市で清正公三百年祭が開催されたとき、その来客を長崎に引きつけるために提案された。1909 年 3 月 7 日付『九州日の出新聞』では、長崎協和会に対して長崎汽船問屋組合から「清正公三百年祭参詣の客を此地に引付くる為め市当局に於いては既に製産品評会開催の挙あり然れとも其方法は完全の上にも完全に之れが設備は盛なる上にも盛にする必要あるを以て同組合は商工、実業、同志、公同の四団体に対して夫れ等の事に就いて充分の尽力ありたしと依頼し置きたるが尚ほ貴会に於ても尽力あり度」という申し出があり、協和会では、上記の 4 団体の代表者を集め、長崎開港 350 年祝を行うことを提案し、「開港三百五十年祭の名称か大きく響くを以て一方には大なる広告の方法ともなり客を引く上に於て効果多かるべしと考ふ」と述べたと報じている。ただしこの時は、製産品評会が開催されるにとどまり、1914 年に、長崎勧業協会と帝国実業協会主催で、長崎開港 350 年記念全国特産品博覧会が出島の一角で開催された。これを報じた同年 4 月 1 日付『九州日之出新聞』は、「真の開港は三百四十余年前にして、三百五十年は五年後の事に属し、博覧会が此開港なる文字を利用し、真に開港を記念する為めの催しに非ずして、営利的に開会されたる事は、多少の遺憾を感ぜざる能はざるも、既に当地に於て開港の名を冠し開会されたる以上吾人は其が成功を収めん事を希望せざる能はず」と記し、博覧会が真の開港を記念するための催しではなく、営利のために「開港」の名を冠したと指摘している。このように、開港記念の企画は、いずれも地域振興のための商業イベントとして提案されていた。

[104] 長崎商工会議所編『長崎商工会議所五十年史』、1011～1013 頁。

[105] 長崎市編・出版『長崎市制五十年史』、後編 194 頁。

[106] 長崎商工会議所編『第一回長崎開港記念会記録』、24 頁。

[107] 長崎商工会議所編『長崎商工会議所五十年史』、1010 頁。長崎開港四百年記念実行委員会「長崎開港四百年とする諸問題」(『長崎談叢』第 50 輯、1971 年）によれば、昭和 6 年は長崎開港 360 年として催され、それ以後は 361 年、362 年と数えられているが、昭和 10 年には 364 年になるべきものが開港 365 年に繰り上がっており、これは元亀 2 年起算の満の年数が、このときから数え年になっているとためと説明している。

[108] 長崎商工会議所編『長崎商工会議所五十年史』、1010 頁。

[109] 長崎市編『長崎市制五十年史』長崎市、1939 年、320 頁。

[110] 長崎商工会議所編『長崎商工会議所五十年史』、1010 頁。

[111] 国際産業観光博覧会協賛会編・出版『長崎市主催国際産業観光博覧会協賛会誌』1935 年、124～125 頁。

[112] 長崎開港記念会編『長崎開港記念会記録　開港三百六十五年第六回』長崎開港記念会、1935 年、1～2 頁。

[113]長崎開港記念会編『長崎開港記念会記録　開港三百六十六年第七回』長崎開港記念会、1936 年、2 頁。

[114] 長崎開港記念会編・発行『長崎開港 366 年開港記念祭の栞』1936 年。

[115] 1934 年の開港記念日の武藤長蔵によるラジオ記念講演放送について紹介した長崎日日新聞の記事では、「長崎では意義深い開港記念祭が行はれます」と報じている（「長崎記開港記念日に際して長崎高商武藤長蔵」1934 年 4 月 27 日)。また、本文でも紹介しているように、1935 年の開港 365 年として開催された一連の催しを、長崎新聞は「長

崎みなと祭」と報じ（1935 年 4 月 27 日）、翌 1936 年に開港記念会が発行したリーフレットは「開港記念祭の栞」と書かれている。

116 これらの講演は、長崎商工会議所『経済月報』第 242 号（1940 年）が、「開港記念祭」という特集で、その全文を紹介している。

117 長崎商工会議所編『長崎商工会議所五十年史』、802 頁。

118 中島功「長崎県の海外発展」『長崎談叢』第 32 輯、1943 年、54～61 頁。

119 丹羽漢吉「開港四百年の過去現在、そして明るい未来へ―長崎広域産業都市のビジョン―」『長崎文化』27 号、1970 年、5 頁。

120 長崎開港 400 年記念実行委員会「長崎開港四百年とする諸問題」（『長崎談叢』第 50 輯、1971 年、54～64 頁。

121 「長崎開港 400 年記念行事・事業趣意」長崎開港 400 年記念実行委員会編・発行『長崎開港 400 年記念誌』（長崎開港 400 年記念実行委員会、1970 年。

122 筆者が長崎商工会議所から提供していただいた、長崎開港記念会（長崎商工会議所内）の引継ぎ資料〈「ながさきみなとまつり」について〉より。

123 https://nagasakiport450th.jp/overview/（2021 年 3 月 8 日）

124 安野眞幸『港市論―平戸・長崎・横瀬浦』日本エディタースクール出版部、1992 年、272～275 頁。